



こころ

上

- 先生と私 -

夏目漱石



青空文庫



わたくし

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚^{はば}かる遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執^とつても心持は同じ事である。よそよそしい頭^{かしら}文字などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになつたのは鎌倉かまくらである。その時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達からぜひ来いという端書はがきを受け取つたので、私は多少の金を工面くめんして、出掛ける事にした。私は金の工面に二に、三日さんちを費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たたないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取つた。電報には母が病気だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達のかねてから国元にいる親たちに勧すすまない結婚を強しいられていた。彼は現

代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心かんじんの当人が氣に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようかと相談をした。私にはどうしていいか分らなかつた。けれども實際彼の母が病気であるとすれば彼は固もとより帰るべきはずであつた。それで彼はとうとう帰る事になつた。せつかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分だいぶん日数ひかずがあるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよいという境遇にいた私

は、当分元の宿に留^とまる覚悟をした。友達は中国のあ
る資産家の息子で金に不自由のない男であつたけれど
も、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私
とそう変りもしなかつた。したがつて一人^{ひとり}ぼつちに
なつた私は別に恰好^{かつこう}な宿を探す面倒ももたなかつたの
である。

宿は鎌倉でも辺鄙^{へんぴ}な方角にあつた。玉突き^{たまつき}だのアイ
スクリームだのというハイカラなものには長い暇^{なわて}を一
つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十
銭は取られた。けれども個人の別荘はそこここにいく

つでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燠^{くす}ぶり返った藁^{わら}葺^{ぶき}の間を通り抜けて磯^{いそ}へ下りると、この辺^{へん}にこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に来た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯^{せんとう}のように黒い頭でごちやごちやしている事もあつた。その中に知った人を一人ももたない私も、こういう賑^{にぎ}やかな景色の中に裏^つまれて、砂の上に寝^ねそべつてみた^{ひざがしら}り、膝頭^{ひざがしら}を波に打たしてそこいらを跳^はね廻^{まわ}るのは愉快

であつた。

私は実に先生をこの雑沓ざつとうの間に見付け出したのであ
る。その時海岸には掛茶屋かけぢややが二軒あつた。私はふとし
た機会はずみからその一軒の方に行き慣なれていた。長谷辺はせへんに
大きな別荘を構もえている人と違ちがつて、各自めいめいに専有の
着換場きがえばを拵こしらへていないここいらの避暑客ふしよには、ぜひと
もこうした共同着換所といつた風ふうなものが必要なので
あつた。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外ほか
に、ここで海水着を洗濯させたり、ここで鹹しおはゆい
身体からだを清めたり、ここへ帽子や傘かさを預けたりするので

ある。海水着を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へはいるたびにその茶屋へ一切を脱ぎ棄^{ぬす}てる事^{こと}にしていた。

二

わたくし

私^{わたくし}がその掛茶屋で先生を見た時は、先生がちょうど着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところであつた。私はその時反対に濡^ぬれた身体^{からだ}を風に吹かして水から上がつて来た。二人の間^{あいだ}には目を遮^{さへぎ}る幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り、私はついに先生を見逃したかも知れなかつた。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放^{ほうまん}漫であつたにもかかわらず、

私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴^つれていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否^{いな}や、すぐ私の注意を惹^ひいた。純粹の日本の浴衣^{ゆかた}を着^はていた彼は、それを床几^{しょうぎ}の上にすぼりと放^{ほう}り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿^はく猿股^{さるまた}一つの外何物^{ほか}も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった。私はその二日前に由井^{ゆい}が浜^{はま}まで行つて、砂の上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺^{なが}めていた。私の尻^{しり}をお

ろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍わきがホテルの裏口になっていたので、私の凝じつとしてゐる間あいだに、大分だいぶ多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕ももと股は出していなかった。女は殊更肉を隠ことさらしがちであつた。大抵は頭に護謨製ゴムせいの頭巾ずきんを被かぶつて、海老茶えびちやや紺こんや藍あいの色を波間に浮かしていた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼めには、猿股一つで済まして皆みんななの前に立っているこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の傍わきを顧みて、そこにこごんでいる

日本人に、一言二言何かいった。その日本人は砂の上

に落ちた手拭てぬぐいを拾い上げているところであつたが、そ

れを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩
き出した。その人がすなわち先生であつた。

私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く

二人の後姿を見守つていた。すると彼らは真直まっすぐに波の

中に足を踏み込んだ。そうして遠浅とおあさの磯いそ近くちかにわいわ

い騒さわいでいる多人数たにんずの間を通り抜けて、比較的広々し

た所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さ

く見えるまで沖の方へ向いて行つた。それから引き返

してまた一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体からだを拭ふいて着物を着て、さつさとどこへか行つてしまった。

彼らの出て行つた後あと、私はやはり元の床几しょうぎに腰をおろして烟草タバコを吹かしていた。その時私はぽかんとしながら先生の事を考えた。どうもどこかで見た事のある顔のように思われてならなかった。しかしどうしてもいつどこで会つた人か想おもい出せずにしまった。

その時の私は屈托くつたくがないというよりむしろ無聊ぶりように苦しんでいた。それで翌日あくるひもまた先生に会つた時刻を見

計らつて、わざわざ掛茶屋かけぢややまで出かけてみた。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽むぎわらぼうを被かぶつてやつて来た。先生は眼鏡めがねをとつて台の上に置いて、すぐ手拭てぬぐいで頭を包んで、すたすた浜を下りて行つた。先生が昨日きのうのように騒よくかくがしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後あとが追い掛けなくなつた。私は浅い水を頭の上まで跳はねかして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標めじるしに抜手ぬきでを切つた。すると先生は昨日と違つて、一種の弧線こせんを描えがいて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せら

れなかった。私が陸^{おか}へ上がつて雫^{しずく}の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行つた。

三

わたくし

私は次の日も同じ時刻に浜へ行つて先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物をいい掛ける機会も、挨拶あいさつをする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむしろ非社交的であつた。一定の時刻に超然として来て、また超然と帰つて行つた。周囲がいくら賑にぎやかでも、それにはほとんど注意を払う様子が見えなかつた。最初いつしよ

に來た西洋人はその後^ごまるで姿を見せなかつた。先生はいつでも一人であつた。

或^ある時先生が例の通りさつさと海から上がつて來て、いつもの場所に脱^ぬぎ棄^すてた浴衣^{ゆかた}を着ようとすると、どうした訳か、その浴衣に砂がいつぱい着いていた。先生はそれを落すために、後ろ向きになつて、浴衣を二、三度振^{ふる}つた。すると着物の下に置いてあつた眼鏡が板^{すきま}の隙間から下へ落ちた。先生は白^{しろ}紺^{がすり}の上へ兵児^{へこおび}帶を締めてから、眼鏡の失^なくなつたのに氣が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛^{こしかけ}の下へ首と

手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うといつて、それを私の手から受け取った。

次の日私は先生の後^{あと}につづいて海へ飛び込んだ。そうして先生といっしよの方角に泳いで行つた。二丁^{ちよう}ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返つて私に話し掛けた。広い蒼い海^{あお}の表面に浮いているものは、その近所に私ら二人より外^{ほか}になかった。そうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしていた。私は自由と歡喜に充^みちた筋肉を動かして海の中で躍^{おど}り狂つた。先生はまたばかりと手足の運動を已^やめて仰向けになつ

たまま浪なみの上に寝た。私もその真似まねをした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」といつて私を促した。比較的強い体質をもった私は、もつと海の中で遊んでいたかった。しかし先生から誘われた時、私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまた元の路みちを浜辺へ引き返した。

私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がど

こにいるかはまだ知らなかった。

それから中^{なか}二日おいてちょうど三日目の午後だった

と思う。先生と掛^{かけ}茶屋^{ぢやや}で出会った時、先生は突然私に

向かつて、「君はまだ大分^{だいぶん}長くここに居るつもりです

か」と聞いた。考えのない私はこういう問いに答える

だけの用意を頭の中に蓄えていなかった。それで「ど

うだか分かりません」と答えた。しかしにやにや笑って

いる先生の顔を見た時、私は急に極^{きま}りが悪くなった。

「先生は？」と聞き返さずにはいられなかった。これ

が私の口を出た先生という言葉の始まりである。

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿といつても普通の旅館と違って、広い寺の境内けいだいにある別荘のような建物であつた。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解わかつた。私が先生先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖くちくせだといつて弁解した。私はこの間の西洋人の事を聞いてみた。先生は彼の風変りのところや、もう鎌倉かまくらにいない事や、色々の話をした末、日本人にさえあまり交際つきあいをもたないのに、そういう外国人と近付きちかづになつたのは不思議だといつたりした。私は最後に先生に向かつて、

どこかで先生を見たように思うけれども、どうしても
思い出せないといった。若い私はその時暗あんに相手も私
と同じような感じを持つてはいはしまいかと疑った。そ
うして腹の中で先生の返事を予期してかかった。とこ
ろが先生はしばらく沈吟ちんぎんしたあとで、「どうも君の顔に
は見覚えみおぼがありませんね。人違いじゃないですか」と
いったので私は変に一種の失望を感じた。

四

わたくし

私は月の末に東京へ帰った。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であつた。私は先生と別れる時に、「これから折々お宅へ伺つても宜よござんすか」と聞いた。先生は単簡たんかんにただ「ええいらつしやい」といっただけであつた。その時分の私は先生とよほど懇意になつたつもりでいたので、先生からもう少し濃こまやかな言葉を予期して掛かつたのである。それでこの物足り

ない返事が少し私の自信を傷めた^{いた}。

私はこういう事でよく先生から失望させられた。先生はそれに気が付いているようでもあり、また全く気が付かないようでもあった。私はまた軽微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかった。むしろそれとは反対で、不安に揺^{うご}かされるたびに、もつと前へ進みたくなつた。もつと前へ進めば、私の予期するあるものが、いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思つた。私は若かつた。けれどもすべての人間に対して、若い血がこう素直に

働こうとは思わなかった。私はなぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解わからなかった。それが先生の亡くなつた今日こんにちになつて、始めて解つて来た。先生は始めから私を嫌つていたのではなかつたのである。先生が私に示した時々そつの素気ない挨拶あいさつや冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする不快の表現ではなかつたのである。傷いたましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止よせという警告を与えたのである。他ひとの懐かしみに応じない先生は、他ひとを軽蔑けいべつする前に、まず自分を軽蔑していたものとみ

える。

私は無論先生を訪ねるつもりで東京へ帰って来た。帰ってから授業の始まるまでにはまだ二週間の日数がある、そのうちに一度行っておこうと思った。しかし帰って二日三日と経^たつうちに、鎌倉^{かまくら}にいた時の気分が段々薄くなつて来た。そうしてその上に彩^{いろど}られる大都会の空気が、記憶の復活に伴う強い刺戟^{しげき}と共に、濃く私の心を染め付けた。私は往来で学生の顔を見るたびに新しい学年に対する希望と緊張とを感じた。私はしばらく先生の事を忘れた。

授業が始まつて、一カ月ばかりすると私の心に、また一種の弛^{たる}みができてきた。私は何だか不足な顔をして往來を歩き始めた。物欲しそうに自分の室^{へや}の中を見廻^{みまわ}した。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私はまた先生に会いたくなつた。

始めて先生の宅^{うち}を訪ねた時、先生は留守であつた。

二度目に行つたのは次の日曜だと覚えている。晴れた空が身に沁^しみ込むように感ぜられる好^い日^ひ和^{より}であつた。その日も先生は留守であつた。鎌倉にいた時、私は先生自身の口から、いつでも大抵^{たいてい}宅にいるという事

を聞いた。むしろ外出嫌いだという事も聞いた。二度来て二度とも会えなかった私は、その言葉を思い出して、理由わけもない不満をどこかに感じた。私はすぐ玄関先を去らなかつた。下女げじょの顔を見て少し躊躇ちゅうちよしてそこに立っていた。この前名刺を取り次うちいだ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内うちへはいつた。すると奥さんらしい人が代って出て来た。美しい奥さんであつた。

私はその人から鄭寧ていねいに先生の出先を教えられた。先生は例月その日になると雑司ぞうしヶ谷がやの墓地にある或ある仏

へ花を手向けたむに行く習慣なのだそうである。「たった今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気の毒そうにいつてくれた。私はえしやく会釈して外へ出た。にぎや賑かな町の方へ一丁ちようほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行ってみる気になった。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それできびすすぐ踵を回めぐらした。

五

わたし
私は墓地の手前にある苗畠なえばたけの左側からはいつて、両
方かえでに楓を植え付けた広い道を奥の方へ進んで行つた。
するとその端はすれに見える茶店ちやみせの中から先生らしい人が
ふいと出て来た。私はその人の眼鏡めがねの縁ふちが日に光るま
で近く寄つて行つた。そうして出し抜けに「先生」と
大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まつて私の顔を
見た。

「どうして……、どうして……」

先生は同じ言葉を二遍へん繰り返した。その言葉は森閑しんかんとした昼のうち中に異様な調子をもつて繰り返された。私は急に何とも応こたえられなくなつた。

「私の後あとを跟つけて来たのですか。どうして……」

先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ沈んでいた。けれどもその表情のうち中には判然はつきりいえないような一種の曇りがあつた。

私は私がどうしてここへ来たかを先生に話した。

「誰だれの墓へ参りに行つたか、妻さいがその人の名をいいま

したか」

「いいえ、そんな事は何もおつしやいません」

「そうですか。——そう、それはいうはずがありませんね、始めて会ったあなたに。いう必要がないんだから」

先生はようやく得心とくしんしたらしい様子であつた。しかし私にはその意味がまるで解わからなかつた。

先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。
依撒伯拉イサベラ何々なになにの墓だの、神僕しんぼくロギンの墓だのという傍かたわらに、
一切衆生いつさいしゆじよう悉有しつうぶつ仏生ぶつしやうと書いた塔婆とうばなどが建ててあつ

た。全権公使何々というのもあった。私は安得烈と彫^ほり付けた小さい墓の前で、「これは何と読むんでしよう」と先生に聞いた。「アンドレとでも読ませるつもりでしょうね」といつて先生は苦笑した。

先生はこれらの墓標が現わす人種々の様式に対して、私ほどに滑稽^{こっけい}もアイロニーも認めてないらしかった。私が丸い墓石^{はかいし}だの細長い御影^{みかげ}の碑^ひだのを指して、しきりにかれこれいいたがるのを、始めのうちは黙って聞いていたが、しまい「あなたは死という事実をまだ真面目^{まじめ}に考えた事がありませんね」といった。私

は黙った。先生もそれぎり何ともいわなくなつた。

墓地の区切り目に、大きな銀杏いちようが一本空を隠すように立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢こずえを見上げて、「もう少しすると、綺麗きれいですよ。この木がすっかり黄葉こうようして、ここいらの地面は金色きんいろの落葉で埋うずまるようになります」といった。先生は月に一度ずつは必ずこの木の下を通るのであつた。

向うの方で凸凹でこぼこの地面をならして新墓地を作っている男が、鍬くわの手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へ切れてすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的あてのない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行つた。先生はいつもより口数を利きかなかつた。それでも私はさほどの窮屈を感じなかつたので、ぶらぶらいつしよに歩いて行つた。

「すぐお宅たくへお帰りですか」

「ええ別に寄る所ありませんから」

二人はまた黙つて南の方へ坂を下りた。

「先生のお宅の墓地はあすこにあるんですか」と私がまた口を利き出した。

「いいえ」

「どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓ですか」

「いいえ」

先生はこれ以外に何も答えなかった。私もその話はそれぎりにして切り上げた。すると一町ちやうほど歩いた後で、先生が不意にそこへ戻あとつて来た。

「あすこには私の友達の墓があるんです」

「お友達のお墓へ毎月まいげつお参りをなさるんですか」

「そうです」

先生はその日これ以外を語らなかつた。

六

私はそれから時々先生を訪問するようになった。行くたびに先生は在宅であつた。先生に会う度数が重なるにつれて、私はますます繁く先生の玄関へ足を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶をした時も、懇意になつたその後も、あまり変りはなかつた。先生は何時も静かであつた。ある時は静か過ぎて淋し

いくらいであつた。私は最初から先生には近づきがた
い不思議があるように思つていた。それでいて、どう
しても近づかなければいけないという感じが、どこ
かに強く働いた。こういう感じを先生に対してもつて
いたものは、多くの人のうちであるいは私だけかも知
れない。しかしその私だけにはこの直感が後^{のち}になつて
事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々しいと
いわれても、馬鹿^{ばか}げていると笑われても、それを見越
した自分の直覚をとにかく頼もしくまた嬉^{うれ}しく思つて
いる。人間を愛し得^うる人、愛せずにはいられない人、

それでいて自分の懐ふところに入ろうとするものを、手をひろげて抱き締める事のできない人、——これが先生であつた。

今いつた通り先生は始終静かであつた。落ち付いていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切る事があつた。窓に黒い鳥影が射さすように。射すかと思うと、すぐ消えるには消えたが。私が始めてその曇りを先生の眉間みけんに認めたのは、雑司ぞうしヶ谷がやの墓地で、不意に先生を呼び掛けた時であつた。私はその異様の瞬間に、今まで快く流れていた心臓の潮流をちよつと鈍らせた。

しかしそれは単に一時の結滞けつたいに過ぎなかつた。私の心は五分と経たたないうちに平素の弾力を回復した。私はそれぎり暗そうなこの雲の影を忘れてしまった。ゆくりなくまたそれを思い出させられたのは、小春こはるの尽きるに間まのない或ある晩の事であつた。

先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ注意してくれた銀杏いちようの大樹たいじゆを眼めの前に想い浮おもかべた。勘定してみると、先生が毎月例まいげつれいとして墓参に行く日が、それからちようど三日目に当つていた。その三日目は私の課業ひるが午で終おえる楽な日であつた。私は先生に向かつ

てこういった。

「先生ぞうし雑司がやヶ谷の銀杏はもう散つてしまつたでしょう

か」

「まだ空坊主からぼうずにはならないでしょう」

先生はそう答えながら私の顔を見守つた。そうしてそこからしばし眼を離さなかつた。私はすぐいった。

「今度お墓参りはかまいにいらつしやる時にお伴ともをしても宜よご

ざんすか。私は先生といつしよにあすこいらが散歩し

てみたい」

「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないです

よ」

「しかしついでに散歩をなすつたらちようど好いじゃありませんか」

先生は何とも答えなかつた。しばらくしてから、「私のは本当の墓参りだけなんだから」といつて、どこまでも墓参^{ぼさん}と散歩を切り離そうとする風^{ふう}に見えた。私と行きたくない口実だか何だか、私にはその時の先生が、いかにも子供らしくて変に思われた。私はなおと先へ出る気になつた。

「じゃお墓参りでも好い^いからいつしよに伴^つれて行つて

下さい。私もお墓参りをしますから」

実際私には墓参と散歩との区別がほとんど無意味のよう
に思われたのである。すると先生の眉まゆがちよつと曇つた。眼のうちにも異様の光が出た。それは迷惑とも嫌悪けんおとも畏怖いふとも片付けられない微かすかな不安らしいものであつた。私は忽ちたちま雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の記憶を強く思い起した。二つの表情は全く同じだつたのである。

「私は」と先生がいった。「私はあなたに話す事のできないある理由があつて、他ひとといつしよにあすこへ墓参

りには行きたくないのです。自分の妻^{さい}さえまだ伴れて
行つた事がないのです」

七

わたくし

私は不思議に思った。しかし私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかった。私はただそのままにして打ち過ぎた。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊むべきものの一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際ができたのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向かつて、研究的に働き掛けたなら、二人

の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまったろう。若い私は全く自分の態度を自覚していなかった。それだから尊いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たろう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。

私は月に二度もしくは三度ずつ必ず先生の宅へ行くようになった。私の足が段々繁くなつた時のある日、先生は突然私に向かつて聞いた。

「あなたは何でそうたびたび私のようなものの宅へやって来るのですか」

「何でといつて、そんな特別な意味はありません。——
しかしお邪魔じやまなんですか」

「邪魔だとはいいいません」

なるほど迷惑という様子は、先生のどこにも見えなかった。私は先生の交際の範囲きわの極めて狭い事を知っていた。先生の元の同級生などで、その頃ころ東京にいたものはほとんど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同郷の学生などには時たま座敷で同座す

る場合もあつたが、彼らのいずれもは皆な私ほど先生に親しき^{さび}みをもつていないように見受けられた。

「私は淋しい人間です」と先生がいった。「だからあなたの来て下さる事を喜んでいます。だからなぜそうたびたび来るのかといつて聞いたのです」

「そりやまたなぜです」

私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかつた。ただ私の顔を見て「あなたは幾歳^{いくつ}ですか」といつた。

この問答は私にとってすこぶる不得要領^{ふとくようりよう}のもので

あつたが、私はその時底そこまで押さずに帰つてしまつた。しかもそれから四日と経たたないうちにまた先生を訪問した。先生は座敷へ出るや否いなや笑い出した。

「また来ましたね」といった。

「ええ来ました」といつて自分も笑つた。

私は外ほかの人からこういわれたらきつと癩しやくに触さわつたろうと思う。しかし先生にこういわれた時は、まるで反対であつた。癩に触らないばかりでなくかえつて愉快だつた。

「私は淋さびしい人間です」と先生はその晩またこの間の

言葉を繰り返した。「私は淋しい人間ですが、ことによるとあなたも淋しい人間じゃないですか。私は淋しくつても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしょうか。動けるだけ動きたいのでしょうか。動いて何かに打つかりたいのでしょうか……」

「私はちつとも淋しくはありません」

「若いうちほど淋しいものはありません。そんならなぜあなたはそうたびたび私の宅へ来るのですか」

「ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返さ

れた。

「あなたは私に会ってもおそろくまだ淋^{さび}しい気がどこかですいているでしょう。私にはあなたのためにその淋しさを根元^{ねもと}から引き抜いて上げるだけの力がないんだから。あなたは外^{ほか}の方を向いて今に手を広げなければならなくなります。今に私の宅の方へは足が向かなくなります」

先生はこういつて淋しい笑い方をした。

八

幸さいわいにして先生の予言は実現されずに済んだ。経験のない当時の私わたくしは、この予言の中うちに含まれている明白な意義さえ了解し得なかった。私は依然として先生に会いに行つた。その内うちいつの間にか先生の食卓で飯めしを食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利きかなければならないようになった。

普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかつ

た。けれども年の若い私の今まで経過して来た境遇からいって、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかった。それが原因げんいんかどうかは疑問だが、私の興味は往来で出合う知りもしない女に向かつて多く働くだけであつた。先生の奥さんにはその前玄関で会つた時、美しいという印象を受けた。それから会うたんに同じ印象を受けない事はなかつた。しかしそれ以外に私はこれといつてとくに奥さんについて語るべき何物ももたないような気がした。

これは奥さんに特色がないというよりも、特色を示

す機会が来なかったのだと解釈する方が正当かも知れない。しかし私はいつでも先生に付属した一部分のよ
うな心持で奥さんに対していた。奥さんも自分の夫の
所へ来る書生だからという好意で、私を遇していたら
しい。だから中間に立つ先生を取り除^のければ、つまり
二人はばらばらになっていた。それで始めて知り合い
になった時の奥さんについては、ただ美しいという外^{ほか}
に何の感じも残っていない。

ある時私は先生の宅^{うち}で酒を飲まされた。その時奥さ
んが出て来て傍^{そば}で酌^{しやく}をしてくれた。先生はいつもより

愉快そうに見えた。奥さんに「お前も一つお上がり」といって、自分の呑み干した盃を差した。奥さんは「私は……」と辞退しかけた後、迷惑そうにそれを受け取った。奥さんは綺麗な眉を寄せて、私の半分ばかり注いで上げた盃を、唇の先へ持つて行つた。奥さんと先生の間に下のような会話が始まつた。

「珍らしい事。私に吞めとおつしやつた事は滅多にないのね」

「お前は嫌いだからさ。しかし稀には飲むといいよ。好い心持になるよ」

「ちつともならないわ。苦しいぎりで。でもあなたは
大変ご愉快ゆかいそうね、少しご酒しゅを召し上がると」

「時によると大変愉快になる。しかしいつでもという
わけにはいかない」

「今夜はいかがです」

「今夜は好いい心持だね」

「これから毎晩少しずつ召し上がると宜よろござんすよ」

「そうはいかない」

「召し上がって下さいよ。その方が淋さむしくなくって好
いから」

先生の宅は夫婦と下女げじよだけであつた。行くたびに大抵はひそりとしていた。高い笑い声などの聞こえる試しはまるでなかつた。或る時あときは宅の中にいるものは先生と私だけのような気がした。

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いていった。私は「そうですね」と答えた。しかし私の心には何の同情も起らなかつた。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅うるさいもののように考えていた。

「二人貰もらつてやろうか」と先生がいった。

「貰^{もら}ッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。

「子供はいつまで経^たつたつてできつこないよ」と先生がいった。

奥さんは黙っていた。「なぜです」と私が代りに聞いた時先生は「天罰だからさ」といつて高く笑った。

九

私^{わたくし}の知る限り先生と奥さんとは、仲の好^い夫婦の
一対^{いつつい}であつた。家庭の一員として暮した事のない私の
ことだから、深い消息は無論解^{わか}らなかつたけれども、
座敷で私と対坐^{たいざ}している時、先生は何かのついでに、
下女^{げじょ}を呼ばないで、奥さんと呼ぶ事があつた。（奥さん
の名は静^{しず}といった）。先生は「おい静」といつでも襖^{ふすま}の
方を振り向いた。その呼びかたが私には優^{やさ}しく聞こえ

た。返事をして出て来る奥さんの様子も甚だ素直であつた。ときたまご馳走ちそうになつて、奥さんが席へ現われる場合などには、この関係が一層明らかに二人の間に描き出されるようであつた。えが

先生は時々奥さんを伴つれて、音楽会だの芝居だのに行つた。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あつた。私は箱根はこねから貰もらつた絵端書えはがきをまだ持つてゐる。日光にっこうへ行つた時は紅葉もみじの葉を一枚封じ込めた郵便も貰つた。

当時の私の眼に映つた先生と奥さんの間柄はまずこ

んなものであつた。そのうちにたつた一つの例外があつた。ある日私がいつもの通り、先生の玄関から案内を頼もうとすると、座敷の方でだれかの話し声がした。よく聞くと、それが尋常の談話でなくつて、どうも言逆いさかいらしかつた。先生の宅は玄関の次がすぐ座敷になつていたので、格子こうしの前に立っていた私の耳にその言逆いさかいの調子だけはほぼ分つた。そうしてそのうちの一人が先生だという事も、時々高まつて来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも低い音おんなので、誰だか判然はつきりしなかつたが、どうも奥さんらしく感ぜられ

た。泣いているようでもあった。私はどうしたものだろうと思つて玄関先で迷つたが、すぐ決心をしてそのまま下宿へ歸つた。

妙に不安な心持が私を襲つて來た。私は書物を読んでも呑み込む能力を失つてしまつた。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ來て私の名を呼んだ。私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しようといつて、下から私を誘つた。先刻帯の間へ包さつきんだままの時計を出して見ると、もう八時過ぎであつた。私は歸つたなりまだ袴はかまを着けていた。私はそれなりすぐ表へ出た。

その晩私は先生といつしよに麦酒ビールを飲んだ。先生は元来酒量に乏しい人であつた。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ、酔うまで飲んでみるという冒険のできない人であつた。

「今日は駄目だめです」といつて先生は苦笑した。

「愉快になれませんか」と私は氣の毒そうに聞いた。

私の腹の中には始終先刻さつきの事が引ひつ懸かつていた。肴さかな

の骨が咽喉のどに刺さつた時のように、私は苦しんだ。打ち明けてみようかと考えたり、止よした方が好よかろうかと思ひ直したりする動揺が、妙に私の様子をそわそわ

させた。

「君、今夜はどうかしていますね」と先生の方からいい出した。「実は私も少し変なのですよ。君に分りますか」

私は何の答えもし得なかった。

「実は先刻妻と少し喧嘩さつきさいけんかをしてね。それで下くだらない神経こうふんを昂奮こうふんさせてしまったんです」と先生がまたいつた。

「どうして……」

私には喧嘩という言葉が口へ出て来なかった。

「妻が私を誤解するのです。それを誤解だといって聞かせても承知しないのです。つい腹を立てたのです」
「どんなに先生を誤解なさるんですか」

先生は私のこの問いに答えようとはしなかった。

「妻が考えているような人間なら、私だつてこんなに苦しんでいやしない」

先生がどんなに苦しんでいるか、これも私には想像の及ばない問題であつた。

十

二人が帰るとき歩きながらの沈黙が一丁も二丁もつづいた。その後で突然先生が口を利き出した。

「悪い事をした。怒って出たから妻はさぞ心配をしているだろう。考えると女は可哀そうなものですね。私の妻などは私より外にまるで頼りにするものがないんだから」

先生の言葉はちよつとそこで途切れたが、別に私の

返事を期待する様子もなく、すぐその続きへ移つて行つた。

「そういうと、夫の方はいかにも心丈夫のようで少し滑稽だが。君、私は君の眼にどう映りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」

「中位ちゆうぐらいに見えます」と私は答えた。この答えは先生にとつて少し案外らしかった。先生はまた口を閉じて、無言で歩き出した。

先生の宅うちへ帰るには私の下宿のつい傍そばを通るのが順路であつた。私はそこまで来て、曲り角で分れるのが

先生に済まないような気がした。「ついでにお宅たくの前までお伴ともしましょうか」といった。先生は忽ち手たちまで私を遮さへきった。

「もう遅いから早く帰りたまえ。私も早く帰つてやるんだから、妻君さいくんのために」

先生が最後に付け加えた「妻君のために」という言葉は妙にその時の私の心を暖かにした。私はその言葉のために、帰つてから安心して寝る事ができた。私はその後も長い間この「妻君のために」という言葉を忘れなかった。

先生と奥さんの間に起った波瀾が、大したものではない事はこれでも解わかった。それがまた滅多めったに起る現象でなかつた事も、その後絶えず出入でいりをして来た私にはほぼ推察ができた。それどころか先生はある時こんな感想すら私に洩もらした。

「私は世の中で女というものをたつた一人しか知らない。妻さい以外の女はほとんど女として私に訴えないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思ってくれています。そういう意味からいって、私たちは最も幸福に生れた人間の一对いっついであるべきはずで

す」

私は今前後の行き掛^ゆりを忘^がれてしまつたから、先生が何のためにこんな自白を私にして聞かせたのか、判然^{はつきり}いう事ができない。けれども先生の態度の真面目^{まじめ}であつたのと、調子の沈んでいたのとは、いまだに記憶に残っている。その時ただ私の耳に異様に響いたのは、「最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」という最後の一句であつた。先生はなぜ幸福な人間といい切らないで、あるべきであると断わつたのか。私にはそれだけが不審であつた。ことにそこへ

一種の力を入れた先生の語気が不審であつた。先生は
事實はたして幸福なのだろうか、また幸福であるべき
はずでありながら、それほど幸福でないのだろうか。
私は心の中で疑^{うち}らざる^{うたぐ}を得なかつた。けれどもその疑
いは一時限りどこかへ葬^{ほうむ}られてしまった。

私はそのうち先生の留守に行つて、奥さんと二人
差向^{さむか}いで話をする機会に出合つた。先生はその日横濱^{よこはま}
を出帆^{しゅっぽん}する汽船に乗つて外国へ行くべき友人を新橋^{しんばし}へ
送りに行つて留守であつた。横浜から船に乗る人が、
朝八時半の汽車で新橋を立つのはその頃の習慣であつ

た。私はある書物について先生に話してもらう必要があつたので、あらかじめ先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行きは前日わざわざ告別に來た友人に対する礼義^{れいぎ}としてその日突然起つた出来事であつた。先生はすぐ帰るから留守でも私に待つているようにといい残して行つた。それで私は座敷へ上がつて、先生を待つ間、奥さんと話をした。

十一

その時の私わたくしはすでに大学生であつた。始めて先生の宅うちへ来た頃ころから見るとずっと成人した気でいた。奥さんとも大分だいぶん懇意になつた後のちであつた。私は奥さんに対して何の窮屈も感じなかつた。差向さしむかいで色々の話をした。しかしそれは特色のないただの談話だから、今ではまるで忘れてしまった。そのうちでたつた一つ私の耳に留まつたものがある。しかしそれを話す前に、

ちよつと断つておきたい事がある。

先生は大学出身であつた。これは始めから私に知れていた。しかし先生の何もしないで遊んでいるという事は、東京へ歸つて少し経^たつてから始めて分つた。私はその時どうして遊んでいられるのかと思つた。

先生はまるで世間に名前を知られていない人であつた。だから先生の学問や思想^{ほか}については、先生と密^み切^{せつ}の関係をもっている私より外に敬意を払^おうもののあるべきはずがなかつた。それを私は常に惜^おしい事だといつた。先生はまた「私のようなものが世の中へ出て、

口を利きいては濟まない」と答えるぎりで、取り合わなかった。私にはその答えが謙遜けんそん過ぎてかえって世間を冷評するようにも聞こえた。実際先生は時々昔の同級生で今著名になつてゐる誰だれ彼かれを捉とらえて、ひどく無遠慮な批評を加える事があつた。それで私は露骨にその矛盾を挙げて云々うんぬんしてみた。私の精神は反抗の意味というよりも、世間が先生を知らないで平氣でいるのが残念だつたからである。その時先生は沈んだ調子で、「どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方がありません」といった。先生の顔には深

い一種の表情がありありと刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解^{わか}らなかつたけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いものだったので、私はそれぎり何もいう勇気が出なかつた。

私が奥さんと話している間に、問題が自然先生の事からそこへ落ちて来た。

「先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしよう」

「あの人は駄^だ目ですよ。そういう事が嫌いなんですか

ら」

「つまり下^{くだ}らない事だと悟つていらつしやるんでしょうか」

「悟るの悟らないのつて、——そりや女だからわたくしには解りませんけれど、おそらくそんな意味じゃないでしょう。やつぱり何かやりたいのでしよう。それでいてできないんです。だから氣の毒ですわ」

「しかし先生は健康からいつて、別にどこも悪いところはないようじゃありませんか」

「丈夫ですとも。何にも持病はありません」

「それでなぜ活動ができないんでしょう」

「それが解^{わか}らないのよ、あなた。それが解るくらいなら私だって、こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらないんです」

奥さんの語気には非常に同情があつた。それでも口元だけには微笑が見えた。外側からいえば、私の方がむしろ真^ま面^め目^めだつた。私はむずかしい顔をして黙つていた。すると奥さんが急に思い出したようにまた口を開いた。

「若い時はあんな人じゃなかったんですよ。若い時は

まるで違っていました。それが全く変ってしまったんです」

「若い時っていつ頃ですか」と私が聞いた。

「書生時代よ」

「書生時代から先生を知っていらつしやったんですか」
奥さんは急に薄赤い顔をした。

十二

奥さんは東京の人であつた。それはかつて先生からも奥さん自身からも聞いて知つていた。奥さんは「本当」と合あいの子こなんですよ」といつた。奥さんの父親はたしか鳥取とっとりかどこかの出であるのに、お母さんの方はまだ江戸といつた時分じぶんの市ヶ谷いちがやで生れた女なので、奥さんは冗談半分そういつたのである。ところが先生は全く方角違いの新潟にいがた県人であつた。だから奥さんが

もし先生の書生時代を知っているとすれば、郷里の關係からでない事は明らかであつた。しかし薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくないようだったので、私の方でも深くは聞かずにおいた。

先生と知り合いになつてから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々の問題で先生の思想や情操に觸れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何もものも聞き得なかつた。私は時によると、それを善意に解釈してもみた。年輩の先生の事だから、艶めかしなまい回想などを若いものに聞かせるのはわざと慎つつしんでい

るのだろうと思つた。時によると、またそれを悪くも取つた。先生に限らず、奥さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代前の因襲のうちに成人したために、そういう艶^{つや}っぽい問題になると、正直に自分を開放するだけの勇気がないのだろうと考えた。もつともどちらも推測に過ぎなかつた。そうしてどちらの推測の裏にも、二人の結婚の奥に横たわる花やかなロマンスの存在を仮定していた。

私の仮定ははたして誤らなかつた。けれども私はただ恋の半面だけを想像に描^{えが}き得たに過ぎなかつた。先

生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとって見惨みじめなものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、まず自分の生命を破壊してしまった。

私は今この悲劇について何事も語らない。その悲劇のためにむしろ生れ出たともいえる二人の恋愛については、先刻さっきいった通りであつた。二人とも私にはほとんど何も話してくれなかった。奥さんは慎みのため

に、先生はまたそれ以上の深い理由のために。

ただ一つ私の記憶に残っている事がある。或る時

はなじぶん

花時分に私は先生といつしよに上野^{うえの}へ行つた。そうし

てそこで美しい一対^{いつつい}の男女^{なんによ}を見た。彼らは睦^{むつ}まじそう

に寄り添って花の下を歩いていた。場所が場所なの

で、花よりもそちらを向いて眼を峙^{そば}だてている人が沢

山あつた。

「新婚の夫婦のようだね」と先生がいった。

「仲^よが好さそうですね」と私が答えた。

先生は苦笑さえしなかった。二人の男女を視線の外^{ほか}

に置くような方角へ足を向けた。それから私にこう聞いた。

「君は恋をした事がありますか」

私はないと答えた。

「恋をしたくはありませんか」

私は答えなかった。

「したくない事はないでしょう」

「ええ」

「君は今あの男と女を見て、ひやか冷評しましたね。あのひやか冷評のうちには君が恋を求めながら相手を得られない

という不快の聲が交まじっていきましょう」

「そんな風ふうに聞こえましたか」

「聞こえました。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解わかっていますか」

私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった。

十三

我々は群集の中にいた。群集はいずれも嬉しそうな顔をしていた。そこを通り抜けて、花も人も見えない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機会がなかった。

「恋は罪悪ですか」と私がその時突然聞いた。

「罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気は前と同じように強かった。

「なぜですか」

「なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずですよ。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじゃないですか」

私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそこは案外に空虚であつた。思いあたるようなものは何にもなかった。

「私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいないつもりです」

「目的物がないから動くのです。あれば落ち付けるだ

ろうと思つて動きたくなるのです」

「今それほど動いちゃいません」

「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」

「それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」

「恋に上るのぼ階段かいだんなんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」

「私には二つのものが全く性質を異ことにしているように思われます」

「いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられないでいるのです。私は実際お気の毒に思っています。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです。しかし……」

私は変に悲しくなった。

「私が先生から離れて行くようにお願いになれば仕方がありませんが、私にそんな気の起つた事はまだありません」

先生は私の言葉に耳を貸さなかった。

「しかし気を付けないといけない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」

私は想像で知っていた。しかし事実としては知らなかった。いずれにしても先生のいう罪悪という意味はもうろう朦朧としてよく解わからなかった。その上私は少し不愉快になった。

「先生、罪悪という意味をもっと判然はつきりいつて聞かして

下さい。それでなければこの問題をここで切り上げして下さい。私自身に罪悪という意味が判然解るまで」

「悪い事をした。私はあなたに真実を話している氣でいた。ところが実際は、あなたを焦慮じらしていたのだ。私は悪い事をした」

先生と私とは博物館の裏から鶯溪うぐいすだにの方角に静かな歩調で歩いて行つた。垣の隙間すきまから広い庭の一部に茂る熊笹くまざさが幽邃ゆうすいに見えた。

「君は私がなぜ毎月雜司ヶ谷まいげつぞうしがやの墓地に埋うまっている友人の墓へ参るのか知っていますか」

先生のこの問いは全く突然であつた。しかも先生は私がこの問いに対して答えられないという事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかつた。すると先生は始めて気が付いたようにこういつた。

「また悪い事をいつた。焦慮じふせるのが悪いと思つて、説明しようとする、その説明がまたあなたを焦慮せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めやみましょう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」

私には先生の話がますます解わからなくなつた。しかし

先生はそれぎり恋を口にしなかった。

十四

年の若い私は^{わたくし}ややともすると一^{いち}図^ずになりやすかつた。少なくとも先生の眼にはそう映っていたらしい。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであつた。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであつた。とどの詰まりをいえば、教壇に立つて私を指導してくれる偉い人々よりもただ^{ひと}独りを守つて多くを語らない先生の方が偉く見えたのであつた。

「あんまり逆上^{のぼせ}しちゃいけません」と先生がいった。

「覚^さめた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があつた。その自信を先生は肯^{うけ}がつてくれなかつた。

「あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭^{いや}になります。私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起るべき変化を予想して見ると、なお苦しくなります」

「私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほ

ど不信用なんですか」

「私はお気の毒に思うのです」

「気の毒だが信用されないとおつしやるんですか」

先生は迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をぼたぼた点じていた椿つばきの花はもう一つも見えなかった。先生は座敷からこの椿の花をよく眺ながめる癖があつた。

「信用しないって、特にあなたを信用しないんじゃないんですい。人間全体を信用しないんです」

その時生垣いけがきの向うで金魚売りらしい声がした。その

外^{ほか}には何の聞こえるものもなかった。大通りから二丁^{ちよう}も深く折れ込んだ小路^{こうじ}は存外^{ぞんがい}静かであつた。家の^{うち}中^{なかつ}はいつもの通りひっそりしていた。私は次の間^まに奥さんのいる事を知っていた。黙って針仕事か何かしている奥さんの耳に私の話し声が聞こえるという事も知っていた。しかし私は全くそれを忘れてしまった。「じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。

先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答えを避けた。

「私は私自身さえ信用していないのです。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになっていゝるのです。自分を呪^{のろ}うより外^{ほか}に仕方がないのです」

「そうむずかしく考えれば、誰だつて確かなものはないでしよう」

「いや考えたんじゃない。やつたんです。やつた後で驚いたんです。そうして非常に怖^{こわ}くなつたんです」

私はもう少し先まで同じ道を辿^{たど}つて行きたかつた。

すると襖^{ふすま}の陰で「あなた、あなた」という奥さんの声が

二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」といった。奥さんは「ちよつと」と先生を次の間まへ呼んだ。二人の間にどんな用事が起つたのか、私には解わからなかつた。それを想像する余裕を与えないほど早く先生はまた座敷へ帰つて来た。

「とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺あざむかれた返報に、残酷ふくしゅうな復讐ふくしゅうをするようになるものだから」

「そりやどういう意味ですか」

「かつてはその人の膝ひざの前に跪ひざまずいたという記憶が、今

度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたしりぞいと思うのです。私は今より一層淋しいさび未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己おのれとに充みちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」

私はこういう覚悟をもっている先生に対して、いふべき言葉を知らなかった。

十五

その後、私は奥さんの顔を見るたびに気になった。
先生は奥さんに対しても始終こういう態度に出るの
だろうか。もしそうだとすれば、奥さんはそれで満
足なのだろうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極めようがな
かった。私はそれほど近く奥さんに接触する機会が
なかったから。それから奥さんは私に会うたびに尋常で

あつたから。最後に先生のいる席でなければ私と奥さんとは滅多めったに顔を合せなかつたから。

私の疑惑はまだその上にもあつた。先生の人間に対するこの覚悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を觀察たつしたりした結果なのだろうか。先生は坐すわつて考える質たちの人であつた。先生の頭さえあれば、こういう態度は坐すわつて世の中を考え、ていても自然と出て来るものだろうか。私にはそうばかりとは思えなかつた。先生の覚悟は生きた覚悟らしかつた。火に焼けて冷却し切つた石造家屋せきぞうの輪廓りんかくとは

違っていた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であつた。けれどもその思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれているらしかった。自分と切り離された他人の事実でなくつて、自分自身が痛切に味わつた事実、血が熱くなつたり脈が止まつたりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった。

これは私の胸で推測するがものはない。先生自身すでにそうだと告白していた。ただその告白が雲の峯のようであつた。私の頭の上に正体の知れない恐ろしいものを蔽い被せた。そうしてなぜそれが恐ろしいか私

にも解^{わか}らなかつた。告白はぼうとしていた。それでいて明らかに私の神経を震^{ふる}わせた。

私は先生のこの人生觀の基点に、或^ある強烈な恋愛事件を仮定してみた。（無論先生と奥さんとの間に起つた）。先生がかつて恋は罪惡だといった事から照らし合せて見ると、多少それが手掛^{てが}りにもなつた。しかし先生は現に奥さんを愛していると私に告げた。すると二人の恋からこんな厭世^{えんせい}に近い覺悟が出ようはずがなかつた。「かつてはその人の前に跪^{ひざまず}いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載^のせさせようとする」と

いった先生の言葉は、現代一般の誰彼たれかれについて用いられるべきで、先生と奥さんの間には当てはまらないもののようにもあつた。

雑司ぞうしヶ谷がやにある誰だれだか分らない人の墓、——これも私の記憶に時々動いた。私はそれが先生と深い縁故のある墓だという事を知っていた。先生の生活に近づきつつありながら、近づく事のできない私は、先生の頭の中にある生命いのちの断片として、その墓を私の頭の中にも受け入れた。けれども私に取つてその墓は全く死んだものであつた。二人の間にある生命いのちの扉を開ける鍵かぎ

にはならなかつた。むしろ二人の間に立つて、自由の往来を妨げる魔物のようであつた。

そうこうしているうちに、私はまた奥さんと差し向いで話をしなければならぬ時機が来た。その頃は日の詰つまつて行くせわしない秋に、誰も注意を惹ひかれる肌寒はださむの季節であつた。先生の附近ふきんで盗難に罹かかつたものが三、四日続いて出た。盗難はいずれも宵の口であつた。大したものを持って行かれた家うちはほとんどなかつたけれども、はいられた所では必ず何か取られた。奥さんは氣味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空あ

けなければならぬ事情ができてきた。先生と同郷の友人で地方の病院に奉職しているものが上京したため、先生は外^{ほか}の二、三名と共に、ある所でその友人に飯^{めし}を食わせなければならなくなった。先生は訳を話して、私に帰ってくる間までの留守番を頼んだ。私はすぐ引き受けた。

十六

私^{わたくし}の行つたのはまだ灯^ひの点^つくか点かない暮れ方であつたが、几帳面^{きちようめん}な先生はもう宅^{うち}にいなかった。「時間^{おく}に後れると悪いって、つい今しがた出掛けました」といった奥さんは、私を先生の書齋へ案内した。

書齋には洋机^{テーブル}と椅子^{いす}の外^{ほか}に、沢山の書物が美しい背皮^{せがわ}を並べて、硝子^{ガラス}越しに電燈^{でんとう}の光で照らされていた。奥さんは火鉢の前に敷いた座蒲団^{ざぶとん}の上へ私^{すわ}を坐らせ

て、「ちつとそこいらにある本でも読んでいて下さい」と断つて出て行つた。私はちようと主人の帰りを待ち受ける客のような気がして済まなかつた。私は畏まつたまま烟草タバコを飲んでいた。奥さんが茶の間で何か下女に話している声が聞こえた。書齋は茶の間の縁側を突き当つて折れ曲つた角かどにあるので、棟むねの位置からいうと、座敷よりもかえつて掛け離れた静かさを領りやうしてゐた。ひとしきりで奥さんの話し声が已やむと、後あとはしんとした。私は泥棒を待ち受けるような心持で、凝じつとしながら気をどこかに配つた。

三十分ほどすると、奥さんがまた書斎の入口へ顔を出した。「おや」といって、軽く驚いた時の眼を私に向けた。そうして客に來た人のように鹿爪しかづめらしく控えている私をおかしそうに見た。

「それじゃ窮屈でしょう」

「いえ、窮屈じゃありません」

「でも退屈でしょう」

「いいえ。泥棒が来るかと思つて緊張しているから退屈でもありません」

奥さんは手に紅茶茶碗こうちやぢやわんを持つたまま、笑いながらそ

ここに立っていた。

「ここは隅っこだから番をするには好くありませんね」と私がいった。

「じゃ失礼ですがもつと真中へ出て来て頂戴。ご退屈だろうと思つて、お茶を入れて持つて来たんですが、茶の間で宜しければあちらで上げますから」

私は奥さんの後に尾いて書齋を出た。茶の間には綺麗な長火鉢に鉄瓶が鳴っていた。私はそこで茶と菓子のご馳走になった。奥さんは寝られないといけないといつて、茶碗に手を触れなかった。

「先生はやつぱり時々こんな会へお出掛でかけになるんですか」

「いいえ滅多めったに出た事はありません。近頃ちかごろは段々人の顔を見るのが嫌いきらになるようです」

こういった奥さんの様子に、別段困ったものだという風ふうも見えなかつたので、私はつい大胆になつた。

「それじゃ奥さんだけが例外なんですか」

「いいえ私も嫌われている一人なんです」

「そりや嘘うそです」と私がいった。「奥さん自身嘘と知りながらそうおっしゃるんでしょう」

「なぜ」

「私にいわせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌いになるんですもの」

「あなたは学問をする方^{かた}だけあつて、なかなかお上手^{じょうず}ね。空^{から}っぽな理屈を使いこなす事が。世の中が嫌いになつたから、私までも嫌いになつたんだともいわれるじゃありませんか。それと^{おん}同なじ理屈で」

「両方ともいわれる事はいわれますが、この場合は私の方が正しいのです」

「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、

面白そうに。空からの盃さかずきでよくああ飽あきずに献酬けんしゅうができる

と思いますわ」

奥みみざわりさんの言葉は少し手痛てひどかった。しかしその言葉の

耳障みみざわりからいうと、決して猛烈なものではなかった。自

分に頭脳みいだのある事を相手に認めさせて、そこに一種の

誇りを見出すほどに奥さんは現代的でなかった。奥さ

んはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしてい

るらしく見えた。

十七

わたくし

私はまだその後あとにいうべき事をもっていた。けれど

も奥さんから徒らいたずらに議論を仕掛ける男のように取られ

ては困ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干した

紅茶茶碗こうちやぢやわんの底を覗のぞいて黙っている私を外そらさないよう

に、「もう一杯上げましょうか」と聞いた。私はすぐ茶

碗を奥さんの手に渡した。

「いくつ？ 一つ？ 二ツつ？」

妙なもので角砂糖をつまみ上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖の数かずを聞いた。奥さんの態度は私に媚こびるというほどではなかったけれど、先刻さつきの強い言葉を力つとめて打ち消そうとする愛嬌あいぎょうに充みちていた。

私は黙って茶を飲んだ。飲んでしまっても黙っていた。

「あなた大変黙り込んでしまったのね」と奥さんがいった。

「何かいうとまた議論を仕掛けるなんて、叱しかり付けら

れそうですから」と私は答えた。

「まさか」と奥さんが再びいった。

二人はそれを緒口いとぐちにまた話を始めた。そうしてまた二人に共通な興味のある先生を問題にした。

「奥さん、先刻さつきの続きをもう少しいわせて下さいませんか。奥さんには空からな理屈と聞こえるかも知れませんが、私はそんな上うわの空そらでいつてる事じゃないんだから」

「じゃおつしやい」

「今奥さんが急にいなくなつたとしたら、先生は現在

の通りで生きていられるでしょうか」

「そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外に^{ほか}仕方がないじゃありませんか。私の所へ持つて来る問題じゃないわ」

「奥さん、私は真面目^{まじめ}ですよ。だから逃げちゃいけません。正直に答えなくっちゃ」

「正直よ。正直にいつて私には分らないのよ」

「じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらつしやるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに伺つていい質問ですから、あなたに伺います」

「何もそんな事を開き直って聞かなくつても好いじゃないませんか」

「真面目くさって聞くがものはない。分り切つてるとおつしやるんですか」

「まあそうよ」

「そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなつたら、先生はどうなるでしょう。世の中のどっちを向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなつたら後でどうなるでしょう。先生から見てもいい。あなたから見てもいい。あなたが急に見て、先生は

幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」

「そりや私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れれば不幸になるだけです。あるいは生きていられないかも知れませんか。そういうと、己惚おのぼれになるようですが、私は今先生を人間としてできるだけ幸福にしているんだと信じていますわ。どんな人があつても私ほど先生を幸福にできるものはないとまで思い込んでいますわ。それだからこうして落ち付いていられるんです」

「その信念が先生の心に好よく映るはずだと私は思いま

すが」

「それは別問題ですわ」

「やっぱり先生から嫌われているとおつしやるんですか」

「私は嫌われてるとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんでしょう。世間というより近頃では人間が嫌いになつてい^{ちかごろ}るんでしょう。だからその人間の一人^{いちにん}として、私も好かれるはずがないじゃありませんか」

奥さんの嫌われているという意味がやつと私に呑^のみ

込めた。

十八

わたくし

私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私の注意に一種の刺戟^{しげき}を与えた。それで奥さんはその頃流行^{ころはや}り始めたいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった。

私は女というものに深い交際^{つきあい}をした経験のない迂闊^{うかつ}な青年であつた。男としての私は、異性に対する本能から、憧憬^{どうけい}の目的物として常に女を夢みていた。けれ

どもそれは懐かしい春の雲を眺めるような心持で、ただ漠然と夢みていたに過ぎなかった。だから実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事が時々あった。私は自分の前に現われた女のために引き付けられる代りに、その場に臨んでかえって変な反撥力を感じた。奥さんに対した私にはそんな気がまるで出なかった。普通男女の間に横たわる思想の不平均という考えもほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。

「奥さん、私がこの前なぜ先生が世間的にもつと活動なさらないのだろうとって、あなたに聞いた時に、あなたはおっしゃった事がありますね。元はああじゃなかったんだって」

「ええいいました。実際あんなじゃなかったんですもの」

「どんなだったんですか」

「あなたの希望なさるような、また私の希望するような頼もしい人だったんです」

「それがどうして急に変化なすったんですか」

「急にじゃありません、段々ああなつて来たのよ」

「奥さんはその間あいだ始終先生といっしよにいらしたんでしよう」

「無論いしましたわ。夫婦ですもの」

「じゃ先生がそう變つて行かれる原因げんいんがちゃんと解わかるべきはずですがね」

「それだから困るのよ。あなたからそういわれると実に辛いつらんですが、私にはどう考えても、考えようがないんですもの。私は今まで何遍なんべんあの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」

「先生は何とおっしゃるんですか」

「何にもいう事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったからというだけで、取り合ってくれないんです」

私は黙っていた。奥さんも言葉を途切^{とぎ}らした。下女^{げじよべや}部屋にいる下女はことりとも音をさせなかった。私はまるで泥棒の事を忘れてしまった。

「あなたは私に責任があるんだと思ってやしませんか」と突然奥さんが聞いた。

「いいえ」と私が答えた。

「どうぞ隠さずにいつて下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんがまたいつた。「それでも私は先生のためにできるだけの事はしているつもりなんです」

「そりや先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証します」

奥さんは火鉢の灰を掻き馴ならした。それから水注みずさしの水を鉄瓶てつびんに注さした。鉄瓶は忽たちまち鳴りを沈めた。

「私はとうとう辛防しんぼうし切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なくいつて下さい、

改められる欠点なら改めるからって、すると先生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだというんです。そういわれると、私悲しくなつて仕様がなぃんです、涙が出てなおの事自分の悪い所が聞きたくなるんです」

奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜めた。

十九

始め私は理解のある女性として奥さんに対していた。わたくし私がその気で話しているうちに、奥さんの様子が次第に変わって来た。奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓を動かし始めた。ハート自分と夫の間には何の蟠まりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それなのに眼を開けて見極めようとすると、やはり何にもない。なん奥さんの苦にする要点はここにあつ

た。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だえんせいてきから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。そう断言しておきながら、ちつともそこに落ち付いていられたかった。底を割ると、かえってその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、とうとう世の中まで厭いやになったのだろうと推測していた。けれどもどう骨を折つても、その推測を突き留めて事実とする事ができなかつた。先生の態度はどこまでも良人おとこらしかつた。親切で優しかつた。疑いの塊かたまりりをその日その

日の情合じょうあいで包んで、そつと胸の奥にしまっておいた奥

さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。

「あなたどう思つて？」と聞いた。「私からああなつたのか、それともあなたのいう人世観じんせいかんとか何とかいうものから、ああなつたのか。隠さずいつて頂戴ちやうだい」

私は何も隠す気はなかつた。けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとすれば、私の答えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかつた。そうして私はそこに私の知らないあるものが

あると信じていた。

「私には解わかりません」

奥さんは予期の外はずれた時に見る憐あわれな表情をその咄とつ嗟に現あらわした。私はすぐ私の言葉を継つぎ足した。

「しかし先生が奥さんを嫌きらっていらつしやらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘うそを吐つかない方かたでしょう」

奥さんは何とも答えなかつた。しばらくしてからこういった。

「実は私すこし思いあたる事があるんですけれども……」

「先生がああいう風ふうになつた原因げんいんについてですか」

「ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけはなくなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが、……」

「どんな事ですか」

奥さんはいい渋ひざつて膝の上に置いた自分の手を眺めていた。

「あなた判断して下すつて。いうから」

「私にできる判断ならやります」

「みんなはいえないのよ。みんないうと叱しかられるから。叱られないところだけよ」

私は緊張して唾つば液を呑み込んだ。

「先生がまだ大学にいる時分、大変仲の好いお友達が一人あつたのよ。その方がちようど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」

奥さんは私の耳に私語ささやくような小さな声で、「実は変死したんです」といった。それは「どうして」と聞き返さずにはいられないようないい方であつた。

「それっ切りしかいえないのよ。けれどもその事があつてから後^{のち}なんです。先生の性質が段々變つて来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく解つていないでしょう。けれどもそれから先生が變つて来たと思えば、そう思われない事もないのよ」

「その人の墓ですか、^{ぞうしがや}雑司ヶ谷にあるのは」

「それもいわない事になつてゐるからいいません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに變化できるものでしょうか。私はそれが知りたくつて堪^{たま}らな

いんです。だからそこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」

私の判断はむしろ否定の方に傾いていた。

二十

わたくし

私は私のつらまえた事実の許す限り、奥さんを慰めようとした。奥さんもまたできるだけ私によつて慰められたそうに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合つた。けれども私はもともと事のおおねの大根を攫つかんでいなかつた。奥さんの不安も実はそこに漂ただよう薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなかつた。知れて

いるところでも悉皆は私に話す事ができなかつた。したがつて慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、おぼつか 覚束ない私の判断に縋りすが 付こうとした。

十時頃ごろになつて先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までのすべてを忘れたように、前に坐すわつてゐる私をそつちのけにして立ち上がった。そして格子こうしを開ける先生をほとんど出合であい頭がしらに迎えた。私は取り残されながら、後あとから奥さんに尾ついて行つ

た。げじょ下女だけはうたたね仮寝でもしていたとみえて、ついに出て来なかつた。

先生はむしろ機嫌がよかつた。しかし奥さんの調子はさらによかつた。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜たまつた涙の光と、それから黒い眉毛まゆげの根に寄せられた八の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺ながめた。もしそれが詐いつわりでなかつたならば、（実際それは詐りとは思えなかつたが）、今までの奥さんの訴えは感傷を玩センチメントもてあそぶためにとくに私を相手に拵こしらえた、徒いたずらな女性の遊戯と取れない事もなかつた。

もつともその時の私には奥さんをそれほど批評的に見る気は起らなかった。私は奥さんの態度の急に輝いて来たのを見て、むしろ安心した。これならばそう心配する必要もなかったんだと考え直した。

先生は笑いながら「どうもご苦労さま、泥棒は来ませんでしたか」と私に聞いた。それから「来ないんで張合はりあいが抜けやしませんか」といった。

帰る時、奥さんは「どうもお気の毒さま」と会釈した。その調子は忙しいところを暇を潰つぶさせて気の毒だというよりも、せつかく来たのに泥棒がはいらなくつ

て気の毒だという冗談のように聞こえた。奥さんはそういいながら、先刻出^{さつき}した西洋菓子の残りを、紙に包んで私の手に持たせた。私はそれを袂^{たもと}へ入れて、人通りの少ない夜寒^{よさむ}の小路^{こうじ}を曲折して賑^{にぎ}やかな町の方へ急いだ。

私はその晩の事を記憶のうちから抽^ひき抜いてここへ詳しく書^{くわ}いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実をいうと、奥さんに菓子を貰^{もら}って帰るとき気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった。私はその翌日^{よくじつ}午飯を食いに学校から帰ってきた。

て、昨夜机の上に載せて置いた菓子の包みを見ると、すぐその中からチョコレートを塗った鳶色とびいろのカステラを出して頬張ほおばった。そうしてそれを食う時に、必竟ひっきようこの菓子を私にくれた二人の男女なんによは、幸福な一対いつついとして世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わった。

秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかった。私は先生の宅うちへ出ではいりをするついでに、衣服の洗い張りあらや仕立したて方かたなどを奥さんに頼んだ。それまで繻絆じゅばんというものを着た事のない私が、シャツの上に黒い襟のかかったものを重ねるようになったのはこの時からで

あつた。子供のない奥さんは、そういう世話を焼くのがかえつて退屈たいくつ凌しのぎになつて、結句けっく身体からだの薬くすりだぐらいの事をいつていた。

「こりや手織ておりね。こんな地じの好いい着物は今まで縫つた事がないわ。その代り縫ぬい悪にくいのよそりやあ。まるで針が立たないんですもの。お蔭かげで針を二本折りましたわ」

こんな苦情をいう時ですら、奥さんは別に面倒めんどうくさいという顔をしなかつた。

二十一

冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ事になった。私の母から受け取った手紙の中に、父の病気の経過が面白くない様子を書いて、今が今という心配もあるまいが、年が年だから、できるなら都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあった。

父はかねてから腎臓じんぞうを病んでいた。中年以後の人にしばしば見る通り、父のこの病は慢性やまいであつた。その

代り要心さえしていれば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑わなかった。現に父は養生のお蔭かげ一つで、今日こんにちまでどうかこうかふいちよう凌しのいで来たように客が来ると吹聴ふいちようしていた。その父が、母の書信によると、庭へ出て何かしている機はずみに突然眩暈めまいがして引ッ繰り返つた。家内かないのものは軽症の脳溢血のういつけつと思い違えて、すぐその手当をした。後あとで医者からどうもそうではないらしい、やはり持病の結果だろうという判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付けて考えるようになったのである。

冬休みが来るにはまだ少し間まがあつた。私は学期の
終りまで待つていても差支さしつかえあるまいと思つて一日二
日そのままにしておいた。するとその一日二日の間
に、父の寝ている様子だの、母の心配している顔だの
が時々眼に浮かんた。そのたびに一種の心苦しさを嘗な
めた私は、とうとう帰る決心をした。国から旅費を送
らせる手数てかずと時間を省くため、私は暇乞いとまごいかたがた先
生の所へ行つて、要いるだけの金を一時立て替えてもら
う事にした。

先生は少し風邪かぜの気味で、座敷へ出るのが臆おっくう劫だと

いつて、私をその書齋に通した。書齋の硝子戸ガラスどから冬に入いつて稀まれに見るような懐かしい和やわらかな日光が机掛つくえかけの上に射さしていた。先生はこの日あたりの好いい室へやの中へ大きな火鉢を置いて、五徳ごとくの上に懸けた金盥かなだらから立ち上あがる湯気ゆげで、呼吸いきの苦しくなるのを防いでいた。「大病は好いいが、ちよつとした風邪かぜなどはかえつて厭いやなものですね」といった先生は、苦笑しながら私の顔を見た。

先生は病気という病気をした事のない人であつた。先生の言葉を聞いた私は笑いたくなつた。

「私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病気は真平まっぴらです。先生だつて同じ事でしょう。試みにやつてご覧になるとよく解わかります」

「そうかね。私は病気になるくらいなら、死病に罹かかりたいと思つてゐる」

私は先生のいう事に格別注意を払わなかつた。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。

「そりや困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持つて行きたまえ」

先生は奥さんと呼んで、必要の金額を私の前に並べ

させてくれた。それを奥の茶箆ちやだんす筒か何かの抽出ひきだしから出して来た奥さんは、白い半紙の上へ鄭寧ていねいに重ねて、「そりゃご心配ですね」といった。

「何遍なんべんも卒倒したんですか」と先生が聞いた。

「手紙には何とも書いてありませんが。——そんなに何度も引ッ繰り返るものですか」

「ええ」

先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病気で亡くなつたのだという事が始めて私に解つた。

「どうせむずかしいんでしょう」と私がいった。

「そうさね。私が代られれば代ってあげても好いが。

——はきけ嘔気はあるんですか」

「どうですか、何とも書いてないから、おおかた大方ないんでしょう」

「吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんがいった。

私はその晩の汽車で東京を立った。

二十二

父の病氣は思つたほど悪くはなかつた。それでも着いた時は、床とこの上に胡坐あぐらをかいて、「みんなが心配するから、まあ我慢してこう凝じつとしている。なにももう起きても好いいのさ」といった。しかしその翌日よくじつからは母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせてしまつた。母は不承無性ふしようぶしように太織ふとおりの蒲団ふとんを畳みながら「お父さんはお前が帰つて来たので、急に気が強くおなりな

んだよ」といった。わたくし私には父の挙動がさして虚勢を張っているようにも思えなかった。

私の兄はある職を帯びて遠い九州にいた。これは万一の事がある場合でなければ、容易に父母ちちははの顔を見る自由の利きかない男であつた。妹は他国へ嫁といだ。これも急場の間に合うように、おいそれと呼び寄せられる女ではなかった。きょうだい兄妹三人のうちで、一番便利なのはやはり書生をしている私だけであつた。その私が母のいい付け通り学校の課業を放り出ほうして、休み前に帰つて来たという事が、父には大きな満足であつた。

「これしきの病気に学校を休ませては気の毒だ。お母さんがあまり仰山ぎょうさんな手紙を書くものだからいけない」
父は口ではこういった。こういったばかりでなく、今まで敷いていた床とこを上げさせて、いつものような元気を示した。

「あんまり軽はずみをしてまた逆回ぶりかえすといけませんよ」
私のこの注意を父は愉快きわそうにしかし極めて軽く受けた。

「なに大丈夫、これでいつものように要心ようじんさえしていれば」

実際父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来して、息も切れなければ、眩暈めまいも感じなかった。ただ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まった症状でもないのです、私たちは格別それを気に留めなかった。

私は先生に手紙を書いて恩借おんしゃくの礼を述べた。正月上旬する時に持参するからそれまで待つてくれるようにと断わった。そうして父の病状の思ったほど険悪でない事、この分なら当分安心な事、眩暈めまいも嘔気はきけも皆無なさなどを書き連ねた。最後に先生の風邪ふうじゃについても

一言いちごんの見舞を附け加えた。私は先生の風邪を實際軽く

見ていたのだ。

私はその手紙を出す時に決して先生の返事を予期していなかった。出した後で父や母と先生の噂うわさなどをしながら、遥はるかに先生の書齋を想像した。

「こんど東京へ行くときには椎茸しいたけでも持って行つてお上げ」

「ええ、しかし先生が干した椎茸などを食うかしら」
「旨うまくはないが、別に嫌きらいな人もないだろう」

私には椎茸と先生を結び付けて考えるのが変であつ

た。

先生の返事が来た時、私はちよつと驚かされた。ことにその内容が特別の用件を含んでいなかった時、驚かされた。先生はただ親切ずくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになった。もつともこれは私が先生から受け取った第一の手紙には相違なかったが。

第一というとき先生と先生の間には書信の往復がたびたびあつたように思われるが、事實は決してそうでない事

をちよつと断わつておきたい。私は先生の生前にたつた二通の手紙しか貰^{もら}つていない。その一通は今いうこの簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛^{あて}で書いた大変長いものである。

父は病気の性質として、運動を慎まなければならないので、床を上げてからも、ほとんど戸外^{そと}へは出なかつた。一度天気のごく穏やかな日の午後庭へ下りた事があるが、その時は万一を氣遣^{きづか}つて、私が引き添うように傍^{そば}に付いていた。私が心配して自分の肩へ手を掛けさせようとしても、父は笑つて応じなかつた。

二十三

わたくし

私は退屈な父の相手としてよく将碁盤しょうぎばんに向かった。

二人とも無精な性質たなので、炬燵こたつにあたたたまま、盤

を櫓やぐらの上へ載せて、駒こまを動かすたびに、わざわざ手を

かけぶとん

掛蒲団の下から出すような事をした。時々持駒もちこまを失く

して、次の勝負の来るまで双方とも知らずにいたりし

た。それを母が灰の中から見付け出して、火箸ひばしで挟み

上げるといふ滑稽こっけいもあつた。

「碁だ^ごと盤が高過ぎる上に、足が着いているから、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤は好^いいね、こうして楽に差せるから。無精者には持つて来いだ。もう一番やろう」

父は勝った時は必ずもう一番やろうといった。そのくせ負けた時にも、もう一番やろうといった。要するに、勝つても負けても、炬燵にあたつて、将碁を差したがる男であつた。始めのうちは珍しいので、この隠居^{いんきよ}じみた娯楽が私にも相当の興味を与えたが、少し時日が経^たつに伴^つれて、若い私の気力はそのくらいな

刺戟しげきで満足できなくなつた。私は金きんや香車きやうしやを握こつた拳こぶしを頭の上へ伸ばして、時々思い切つたあくびをした。

私は東京の事を考えた。そうして漲みなぎる心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動こどうを聞いた。不思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められているように感じた。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人おとなしい男であつた。他に認められるといふ点ひとからいえばどつちも零れいであつた。それでいて、この

将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往来ゆききをした覚えおぼのない先生は、歡樂の交際から出る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた。ただ頭というのはあまりに冷ひややか過ぎるから、私は胸といい直したい。肉のなかに先生の力が喰くい込んでいるといつても、血のなかに先生の命が流れているといつても、その時の私には少しも誇張でないように思われた。私は父が私の本当の父であり、先生はまたいうまでもなく、あかの他人であるという明白な事実を、ことさら

に眼の前に並べてみて、始めて大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた。

私がつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今まで珍しかった私が段々陳腐ちんぷになつて来た。これは夏休みなどに国へ帰る誰でもが一樣に経験する心持だろうと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置かないように、ちやほや歓待もてなされるのに、その峠を定規通り通ていきどおり越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて来て、しまいには有つても無くつても構わないもののように粗末に取り扱われがちになるものである。私も滞在中に

その峠を通り越した。その上私は国へ帰るたびに、父にも母にも解^{わか}らない変なところを東京から持つて帰つた。昔でいうと、儒者^{じゅしや}の家へ切支丹^{キリシタン}の臭い^{にお}を持ち込むように、私の持つて帰るものは父とも母とも調和しなかった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いているものだから、出すまいと思つても、いつかそれが父や母の眼に留^とまつた。私はつい面白くなくなつた。早く東京へ帰りたくなつた。

父の病氣は幸い現状維持のまま、少しも悪い方へ進む模様は見えなかつた。念のためにわざわざ遠くか

ら相当の医者を招いたりして、慎重に診察してもらつてもやはり私の知っている以外に異状は認められなかった。私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つといい出すと、人情は妙なもので、父も母も反対した。

「もう帰るのかい、まだ早いじゃないか」と母がいった。

「まだ四、五日いても間に合うんだろう」と父がいった。

私は自分の極めた出立しゅったつの日を動かさなかった。

二十四

東京へ帰つてみると、松飾まつかざりはいつか取り払われていた。町は寒い風の吹くに任せて、どこを見てもこれと
いうほどの正月めいた景気はなかった。

わたくし さつそく

私は早速先生のうちへ金を返しに行つた。例の椎茸しいたけ
もついでに持つて行つた。ただ出すのは少し変だから、母がこれを差し上げてくれといいましたとわざわざ
ぎ断つて奥さんの前へ置いた。椎茸は新しい菓子折に

入れてあつた。鄭寧^{ていねい}に礼を述べた奥さんは、次の間へ立つ時、その折を持つて見て、軽いのに驚かされたのか、「こりや何の御菓子^{おかし}」と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊^{たんぱく}な小供^{こども}らしい心を見せた。

二人とも父の病気について、色々掛念^{けねん}の問いを繰り返してくれた中に、先生はこんな事をいつた。

「なるほど容体^{ようたい}を聞くと、今が今どうという事もないようですが、病気が病気だからよほど気をつけないといけません」

先生は腎臟じんぞうの病やまいについて私の知らない事を多く知つ

ていた。

「自分で病気に罹かかつていながら、気が付かないで平気でいるのがあの病の特色です。私の知つたある士官しかんは、とうとうそれでやられたが、全く嘘うそのような死に方をしたんですよ。何しろ傍そばに寝ていた細君さいくんが看病をする暇もなんにもないくらいなんですからね。夜中にちよつと苦しいといつて、細君を起したぎり、翌あくる朝はもう死んでいたんです。しかも細君は夫が寝ているとばかり思つてたんだつていうんだから」

今まで楽天的に傾いていた私は急に不安になった。

おやじ

「私の父もそんなになるでしょうか。ならんともいえないですね」

「医者は何というのです」

とても

「医者は到底治らないというんです。けれども当分のところ心配はあるまいともいうんです」

「それじゃ好いでしよう。医者がそういうなら。私の今話したのは気が付かずにいた人の事で、しかもそれがずいぶん乱暴な軍人なんだから」

私はやや安心した。私の変化を凝じつと見ていた先生

は、それからこう付け足した。

「しかし人間は健康にしろ病気にしろ、どっちにしても脆もろいものですね。いつどんな事でどんな死にようをしないとも限らないから」

「先生もそんな事を考えてお出いでですか」

「いくら丈夫の私でも、満更まんざら考えない事もあります」
先生の口元には微笑の影が見えた。

「よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自然に。それからあつと思まう間に死ぬ人もあるでしょう。不自然な暴力で」

「不自然な暴力って何ですか」

「何だかそれは私にも解^{わか}らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょう」

「すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭^{かげ}です
すね」

「殺される方はちつとも考えていなかった。なるほど
そういえばそうだ」

その日はそれで帰った。帰ってから父の病気はそれほど苦にならなかった。先生のいった自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限り

の浅い印象を与えただけで、後はあとは何らのこだわりを私の頭に残さなかった。私は今まで幾度いくたびか手を着けようとしては手を引つ込めた卒業論文を、いよいよ本式に書き始めなければならぬと思い出した。

二十五

その年の六月に卒業するはずの私は、わたくしぜひともこの論文を成規通りせいぎどお四月いっぱいに書き上げてしまわなければならなかった。二、三、四と指を折つて余る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸を疑うたぐった。他のものはよほど前から材料を蒐あつめたり、ノートを溜ためたりして、余所目にも忙いそがしそうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けずにいた。私にはただ年が改

まったら大いにやろうという決心だけがあつた。私はその決心でやり出した。そうして忽ち動けなくなつた。今まで大きな問題を空に描いて、骨組みだけはほぼでき上っているくらいに考えていた私は、頭を抑えて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。そうして練り上げた思想を系統的に纏める手数を省くために、ただ書物の中にある材料を並べて、それに相当な結論をちよつと付け加える事にした。

私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであつた。私がかつてその選択について先生の意見を尋

ねた時、先生は好いでしようといった。狼狽ろうばいした気味の私は、早速さつそく先生の所へ出掛けて、私の読まなければならぬ参考書を聞いた。先生は自分の知っている限りの知識を、快く私に与えてくれた上に、必要の書物を、二、三冊貸そうといった。しかし先生はこの点について毫ごうも私を指導する任に当ろうとしなかった。

「近頃ちかごろはあんまり書物を読まないから、新しい事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が好いでしよう」先生は一時非常の読書家であつたが、その後ごどういう訳か、前ほどこの方面に興味が働かなくなつたよう

だと、かつて奥さんから聞いた事があるのを、私はその時ふと思い出した。私は論文をよそにして、そぞろに口を開いた。

「先生はなぜ元のように書物に興味をもち得ないんですか」

「なぜという訳ありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほどえらくならないと思うせいでしょう。それから……」

「それから、まだあるんですか」

「まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人

の前へ出たり、人に聞かれたりして知らない恥のうにきまりが悪かったものだが、近頃は知らないという事が、それほど恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでみようという元気が出なくなつたのでしよう。まあ早くいえば老い込んだのです」

先生の言葉はむしろ平静であつた。世間に背中を向けた人の苦味くみを帯びていなかっただけに、私にはそれほどの手応てごたえもなかった。私は先生を老い込んだとも思わない代りに、偉いとも感心せずに帰つた。

それからの私はほとんど論文に崇たられた精神病者のように眼を赤くして苦しんだ。私は一年前ぜんに卒業した友達について、色々様子を聞いてみたりした。そのうちの一人は締切いちにんの日しめきりに車で事務所へ馳かけつけて漸ようやく間に合わせたといった。他の一人は五時を十五分ほど後おくらして持つて行つたため、危あやうく跳ね付はけられようとしたところを、主任教授の好意でやつと受理してもらつたといった。私は不安を感じると共に度胸すを据えた。毎日机の前で精根のつづく限り働いた。でなければ、薄暗い書庫にはいつて、高い本棚のあちらこちらを

見廻みまわした。私の眼は好事家こうずかが骨董こつとうでも掘り出す時のように背表紙の金文字をあさった。

梅が咲くにつけて寒い風は段々向むきを南へ更かえて行つた。それが一仕切ひとしきり経つと、桜の噂うわさがちらほら私の耳に聞こえ出した。それでも私は馬車馬のように正面ばかり見て、論文に鞭むちうたれた。私はついに四月の下旬が来て、やっと予定通りのものを書き上げるまで、先生の敷居またを跨がなかった。

二十六

わたくし

私の自由になつたのは、八重桜の散つた枝にいつしか青い葉が霞かすむように伸び始める初夏の季節であつた。私は籠かごを抜け出した小鳥の心をもつて、広い天地を一目ひとめに見渡しながら、自由に羽搏はばたきをした。私はすぐ先生の家うちへ行つた。枳殼からたちの垣が黒ずんだ枝の上に、萌もえるような芽を吹いていたり、柘榴ざくろの枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかそうに日光を映し

ていたりするのが、道々私の眼を引き付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような珍しさを覚えた。

先生は嬉し^{うれ}そうな私の顔を見て、「もう論文は片付いたんですか、結構ですね」といった。私は「お蔭^{かげ}でようやく済みました。もう何にもする事はありません」といった。

実際その時の私は、自分のなすべきすべての仕事ですでに結了^{けつりょう}して、これから先は威張^{おご}って遊んでいても構わないような晴やかな心持でいた。私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。

私は先生の前で、しきりにその内容を喋々ちやうちやうした。先生

はいつもの調子で、「なるほど」とか、「そうですね」と
かいつてくれたが、それ以上の批評は少しも加えな
かった。私は物足りないというよりも、聊いささか拍子抜け
の気味であつた。それでもその日私の気力は、因循いんじゆん
らしく見える先生の態度に逆襲を試みるほどに生々いきいきして
いた。私は青く蘇生よみがえろうとする大きな自然の中に、先
生を誘い出そうとした。

「先生どこかへ散歩しましょう。外へ出ると大変好い
心持です」

「どういへ」

私はどこでも構わなかった。ただ先生を伴^つれて郊外へ出たかった。

一時間の後、^{のち}先生と私は目的どおり市を離れて、村とも町とも区別の付かない静かな所を宛^{あて}もなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔らかい葉を撈^もぎ取って芝^{しば}笛^{ぶえ}を鳴らした。ある鹿^か児^ご島^{しま}人を友達にもつて、その人の真^ま似^ねをしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛と^いうものを鳴らす事が上手であつた。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向い

て歩いた。

やがて若葉に鎖とざされたように蒨鬱こんもりした小高い一構ひとつかまえの下に細い路みちが開ひらけた。門の柱に打ち付けた標札に何々園とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだらだら上のぼりになつてゐる入口を眺ながめて、「はいつてみようか」といった。私はすぐ「植木屋ですわね」と答えた。

植込うえこみの中を一ひとうねりして奥へ上のぼると左側に家うちがあつた。明け放つた障子しょうじの内はがらんとして人の影も見えなかつた。ただ軒先のきり先に据えた大きな鉢の中に飼つてあ

る金魚が動いていた。

「静かだね。断わらずにはいつでも構わないだろうか」
「構わないでしよう」

二人はまた奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかった。躑躅^{つづじ}が燃えるように咲き乱れていた。先生はそのうちで樺色^{かほいろ}の丈^{たけ}の高いのを指して、「これは霧島^{きりしま}でしょう」といった。

芍薬^{しやくやく}も十坪^{とつぽ}あまり一面に植え付けられていたが、まだ季節が来ないので花を着けているのは一本もなかった。この芍薬^{ばたけ}畠^{そば}の傍にある古びた縁台のようなもの

の上に先生は大の字なりに寝た。私はその余った端はじの方に腰をおろして烟草タバコを吹かした。先生は蒼あおい透すき徹とおるような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われていた。その若葉の色をよくよく眺ながめると、一々違っていた。同じ楓かえでの樹きでも同じ色を枝に着けているものは一つもなかった。細い杉苗いただきの頂かぶに投げ被かぶせてあつた先生の帽子が風に吹かれて落ちた。

二十七

わたくし

私はすぐその帽子を取り上げた。ところどころ所々に着いている赤土を爪つめで弾はじきながら先生を呼んだ。

「先生帽子が落ちました」

「ありがとう」

からだ

身体を半分起してそれを受け取った先生は、起きるとも寝るとも片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞いた。

「突然だが、君の家には財産がよつぽどあるんですか」

「あるというほどありません」

「まあどのくらいあるのかね。失礼のようだが」

「どのくらいって、山と田地でんちが少しあるぎりで、金なんかまるでないんでしよう」

先生が私の家の経済いえについて、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであつた。私の方はまだ先生の暮し向きに関して、何も聞いた事がなかつた。先生と知り合いになつた始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑うたぐつた。その後もこの疑いは絶えず私の

胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨あらわな問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとばかり思つていつでも控えていた。若葉の色で疲れた眼を休ませていた私の心は、偶然またその疑いに触れた。

「先生はどうなんです。どのくらいの財産をもつていらつしやるんですか」

「私は財産家と見えますか」

先生は平生からむしろ質素な服装なりをしていた。それに家内かないは小人数こにんずであつた。したがって住宅も決して広くはなかつた。けれどもその生活の物質的に豊かな事

は、内輪にはいり込まない私の眼にさえ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅沢ぜいたくといえないまでも、あたじけなく切り詰めた無弾力性のものではなかつた。

「そうでしょう」と私がいつた。

「そりやそのくらいの金はあるさ、けれども決して財産家じゃありません。財産家ならもつと大きな家うちでも造るさ」

この時先生は起き上つて、縁台の上に胡坐あぐらをかいていたが、こういう終ると、竹の杖つえの先で地面の上へ円のようなものを描かき始めた。それが済むと、今度はス

テツキを突き刺すように真直まつすぐに立てた。

「これでも元は財産家なんだがなあ」

先生の言葉は半分独り言ひとごとのようであつた。それでその後あとに尾ついて行き損なつた私は、つい黙つていた。

「これでも元は財産家なんですよ、君」といい直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答えなかつた。むしろ不調法で答えられなかつたのである。すると先生がまた問題を他よそへ移した。

「あなたのお父さんの病気はその後どうなりました」

私は父の病気について正月以後何にも知らなかつ

た。月々国から送つてくれる為替かわせと共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟しゆせきであつたが、病氣の訴えはそのうちにほとんど見当らなかつた。その上書体も確かであつた。この種の病人に見る顫ふるえが少しも筆の運びはこを乱していなかった。

「何ともいつて来ませんが、もう好いいんでしよう」

「好よければ結構だが、——病症が病症なんだからね」

「やつぱり駄目ですかね。でも当分は持ち合つてるんでしよう。何ともいつて来ませんよ」

「そうですか」

私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病気を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだままをその通り口にする、普通の談話と思つて聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があつた。先生自身の経験を持たない私は無論そこに気が付くはずがなかつた。

二十八

「君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらっておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰っておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」

「ええ」

わたくし

私は先生の言葉に大した注意を払わなかった。私の家庭でそんな心配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた。その上先生のいう事の、先生として、あまりに実際的なのに私は少し驚かされた。しかしそこは年長者に対する平生の敬意が私を無口にした。

「あなたのお父さんが亡くなられるのを、今から予想してかかるような言葉遣いことばづかをするのが気に触さわつたら許してくれたまえ。しかし人間は死ぬものだからね。どんなに達者なもので、いつ死ぬか分らないものだから

らね」

先生の口気は珍しく苦々しかった。

「そんな事をちつとも気に掛けちゃいけません」と私は弁解した。

「君の兄弟は何人でしたかね」と先生が聞いた。

きようだい

先生はその上に私の家族の人数を聞いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父や叔母の様子を問いたなどした。そうして最後にこういった。

「みんな善い人ですか」

「別に悪い人間というほどのものもないようです。」

大抵田舎者いなかものですから」

「田舎者はなぜ悪くないんですか」

私はこの追窮ついきゆうに苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかった。

「田舎者は都会のものより、かえって悪いくらいなものです。それから、君は今、君の親戚しんせきなぞのうち中に、これといって、悪い人間はいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型いかにに入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみ

んな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人に変るんだから恐ろしいのです。だから油断ができないんです」

先生のいう事は、ここで切れる様子もなかった。私はまたここで何かいおうとした。すると後ろうしろの方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。

縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉苗の傍そばに、熊笹くまざさが三坪みつばほど地を隠すように茂って生えてい

た。犬はその顔と背を熊笹の上に現わして、盛んに吠え立てた。そこへ十とおぐらいの小供こどもが馳かけて来て犬を叱しかり付けた。小供は徽章きしやうの着いた黒い帽子を被かぶつたまま先生の前へ廻まわつて礼をした。

「叔父さん、はいって来る時、家うちに誰だれもいなかったかい」と聞いた。

「誰もいなかったよ」

「姉さんやおつかさんが勝手の方にいたのに」

「そうか、いたのかい」

「ああ。叔父さん、今日こんにちはって、断つてはいって来ると

好よかつたのに」

先生は苦笑した。懐中ふところから蟄口がまぐちを出して、五錢の白銅はくどうを小供の手に握らせた。

「おつかさんにそういつとくれ。少しここで休まして下さいって」

小供は怜悯りこうそうな眼に笑わらいを漲みなぎらして、首肯うなずいて見せた。

「今斥候長せつこうちようになつてるところなんだよ」

小供はこう断つて、躑躅つっじの間を下の方へ駆け下りて行つた。犬も尻尾しっぽを高く巻いて小供の後を追いつけ

た。しばらくすると同じくらいの年格好の小供が二、三人、これも斥候長の下りて行った方へ駈けていった。

二十九

先生の談話は、この犬と小供のために、結末まで進行する事ができなくなつたので、私はついにその要領を得ないでしまった。先生の氣にする財産うんぬん云々の掛念けねんはその時の私わたくしには全くなかつた。私の性質として、また私の境遇からいって、その時の私には、そんな利害の念に頭を悩ます余地がなかつたのである。考えるとこれは私がまだ世間に出ないためでもあり、また實際

その場に臨まないためでもあつたろうが、とにかく若い私にはなぜか金の問題が遠くの方に見えた。

先生の話のうちでただ一つ底まで聞きたかつたのは、人間がいざという間際に、誰でも悪人になるという言葉の意味であつた。単なる言葉としては、これだけでも私に解^{わか}らない事はなかつた。しかし私はこの句についてもつと知りたかつた。

犬と小供^{こども}が去つたあと、広い若葉の園は再び故^{もと}の静かさに帰つた。そうして我々は沈黙に鎖^とざされた人のようにしばらく動かずにいた。うるわしい空の色がそ

の時次第に光を失つて来た。眼の前にある樹は大概

かえで

楓であつたが、その枝に滴るしたたように吹いた軽い緑の若

葉が、段々暗くなつて行くように思われた。遠い往来
を荷車を引いて行く響きがごろごろと聞こえた。私は
それを村の男が植木か何かを載せて縁日えんにちへでも出掛け
るものと想像した。先生はその音を聞くと、急に瞑想めいそう
から呼吸いきを吹き返した人のように立ち上がった。

「もう、そろそろ帰りましょう。大分日だいぶんが永くなつた
ようだが、やつぱりこう安閑あんかんとしているうちには、い
つの間にか暮れて行くんだね」

先生の背中には、さつき縁台の上に仰向きに寝た痕がいつぱい着いていた。私は両手でそれを払い落した。

「ありがとう。脂がこびり着いてやしませんか」

「綺麗な落ちました」

「この羽織はつい此間拵えたばかりなんだよ。だからむやみに汚して帰ると、妻に叱られるからね。有難う」

二人はまただらだら坂の中途にある家の前へ来た。はいる時には誰もいる気色の見えなかった縁に、お上

さんが、十五、六の娘を相手に、糸巻へ糸を巻きつけていた。二人は大きな金魚鉢の横から、「どうもお邪魔（じやま）をしました」と挨拶（あいさつ）した。お上さんは「いいえお構（かま）い申しも致（いた）しませんで」と礼を返した後（あと）、先刻（さつき）小供（こども）にやった白銅（はくどう）の礼を述べた。

門口（かどぐち）を出て二、三町（ちやう）来た時、私はついに先生（せんせい）に向かつて口を切った。

「さきほど先生のいわれた、人間（だれ）は誰（だれ）でもいいざという間際に悪人になるんだという意味（いみ）ですね。あれはどういう意味（いみ）ですか」

「意味といつて、深い意味ありません。——つまり事実なんですよ。理屈じゃないんだ」

「事実で差支さしつかえありませんが、私の伺いたいのは、いざという間際という意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」

先生は笑い出した。あたかも時機じきの過ぎた今、もう熱心に説明する張合いがないといった風ふうに。

「金かねさ君。金を見ると、どんな君子くんしでもすぐ悪人になるのさ」

私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰つまらなかつ

た。先生が調子に乗らないごとく、私も拍子抜けの気味であつた。私は澄ましてさつさと歩き出した。いきおい先生は少し後れがちになつた。^{おく}先生はあとから「おいおい」と声を掛けた。

「そら見たまえ」

「何をですか」

「君の気分だつて、私の返事一つですぐ変わるじゃないか」

待ち合わせるために振り向いて立ち^た留^どまつた私の顔を見て、先生はこういつた。

三十

その時の私は腹わたくしの中で先生を憎らしく思つた。肩を並べて歩き出してからも、自分の聞きたい事をわざと聞かずにいた。しかし先生の方では、それに気が付いていたのか、いないのか、まるで私の態度に拘泥こだわる様子を見せなかつた。いつもの通り沈黙がちに落ち付き払つた歩調をすまして運んで行くので、私は少し業腹ごうはらになつた。何とかいって一つ先生をやっ付けてみたく

なつて来た。

「先生」

「何ですか」

「先生はさつき少し昂奮こうふんなさいましたね。あの植木屋の庭で休んでいる時に。私は先生の昂奮したのを滅多めったに見た事がないんですが、今日は珍しいところを拝見したような気がします」

先生はすぐ返事をしなかった。私はそれを手応えてごたのあったようにも思つた。また的まとが外れたはずようにも感じた。仕方がないから後はあとはいわれない事にした。すると先

生がいきなり道の端へ寄つて行つた。そうして綺麗に刈り込んだ生垣の下で、裾をまくつて小便をした。私は先生が用を足す間ぼんやりそこに立っていた。

「やあ失敬」

先生はこういつてまた歩き出した。私はとうとう先生をやり込める事を断念した。私たちの通る道は段々賑やかになった。今までちらほらと見えた広い畠の斜面や平地が、全く眼に入らないように左右の家並が揃つてきた。それでも所々宅地の隅などに、豌豆の蔓を竹にからませたり、金網で鶏を囲い飼いにしたり

するのが閑静に眺められた。市中から帰る駄馬が仕切りなく擦れ違つて行つた。こんなものに始終気を奪られがちな私は、さつきまで胸の中にあつた問題をどこかへ振り落してしまつた。先生が突然そこへ後戻りをした時、私は實際それを忘れていた。

「私は先刻そんなに昂奮したように見えたんですか」
「そんなにというほどでもありませんが、少し……」

「いや見えても構わない。實際昂奮するんだから。私は財産の事をいうときつと昂奮するんです。君にはどう見えるか知らないが、私はこれで大變執念深い男な

んだから。人から受けた屈辱や損害は、十年たつても二十年たつても忘れやしないんだから」

先生の言葉は元よりもお昂奮していた。しかし私の驚いたのは、決してその調子ではなかった。むしろ先生の言葉が私の耳に訴える意味そのものであった。先生の口からこんな自白を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかった。私は先生の性質の特色として、こんな執着^{しゅうじやく}力をいまだかつて想像した事さえなかった。私は先生をもつと弱い人と信じていた。そうしてその弱くて高い^{ところ}処に、私の懐かしみの根を置いて

いた。一時の気分で先生にちよつと盾を突いてみようとした私は、この言葉の前に小さくなつた。先生はこういつた。

「私は他に欺ひとあざむかれたのです。しかも血のつづいた親戚しんせきのものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼らは、父の死ぬや否いなや許しがたい不徳義漢に變つたのです。私は彼らから受けた屈辱と損害を小供こどもの時から今日まで背負しよわされている。恐らく死ぬまで背負わされ通しでしょう。私は死ぬまでそれを忘れる事ができ

ないんだから。しかし私はまだ復讐ふくしゅうをしずにいる。考
えると私は個人に対する復讐以上の事を現にやってい
るんだ。私は彼らを憎むばかりじゃない、彼らが代表
している人間というものを、一般に憎む事を覚えたの
だ。私はそれで沢山だと思う」

私は慰藉いしやの言葉さえ口へ出せなかった。

三十一

その日の談話もついにこれぎりで発展せずになつた。^{わたくし}私はむしろ先生の態度に畏縮^{いしゆく}して、先へ進む気が起らなかつたのである。

二人は市の外れから電車に乗ったが、車内ではほとんど口を聞かなかつた。電車を降りると間もなく別れなければならなかつた。別れる時の先生は、また變つていた。常よりは晴やかな調子で、「これから六月まで

は一番気楽な時ですね。ことによると生涯で一番気楽かも知れない。精出して遊びたまえ」といった。私は笑って帽子を脱^とった。その時私は先生の顔を見て、先生ははたして心のどこで、一般の人間を憎んでいるのだろうか^{うたぐ}と疑った。その眼、その口、どこにも厭^{えん}世的^{せいてき}の影は射^さしていなかった。

私は思想上の問題について、大いなる利益を先生から受けた事を自白する。しかし同じ問題について、利益を受けようとしても、受けられない事が間々^{まま}あったといわなければならない。先生の談話は時として

不得要領に終った。その日二人の間に起った郊外の談話も、この不得要領の一例として私の胸の裏に残った。無遠慮な私は、ある時ついにそれを先生の前に打ち明けた。先生は笑っていた。私はこういつた。

「頭が鈍くて要領を得ないのは構いませんが、ちゃんと解わかつてくるくせに、はつきりいつてくれないのは困ります」

「私は何にも隠してやしません」

「隠していraftしやいます」

「あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過

去とを、ごちゃごちゃに考えているんじゃないやありませんか。私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考えをむやみに人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前ことごとに物語らなくてはならないとなると、それはまた別問題になります」

「別問題とは思われません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私にはほとんど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただ

けで、満足はできないのです」

先生はあきれたといった風ふうに、私の顔を見た。

まきタバコ
巻烟草を持っていたその手が少し顫ふるえた。

「あなたは大胆だ」

「ただ真面目まじめなんです。真面目に人生から教訓を受け

たいのです」

「私の過去を許あばいてもですか」

許くという言葉が、突然恐ろしい響ひびきをもつて、私

の耳を打った。私は今私の前に坐すわっているのが、一人

の罪人ざいにんであつて、不断から尊敬している先生でないよ

うな気がした。先生の顔は蒼あおかった。

「あなたは本当に真面目なんですか」と先生が念を押した。「私は過去の因果いんがで、人を疑うたぐりつけている。だから実はあなたも疑っている。しかしどうもあなただけは疑りたくない。あなたは疑るにはあまりに単純すぎるようだ。私は死ぬ前にたった一人で好いいから、他ひとを信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なつてくれますか。あなたははらの底から真面目ですか」

「もし私の命が真面目なものなら、私の今いった事も

真面目です」

私の声は顫えた。

「よろしい」と先生がいった。「話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。その代り……。いやそれは構わない。しかし私の過去はあなたに取ってそれほど有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増ましかかも知れませんよ。それから、——今は話せないんだから、そのつもりでいて下さい。適當の時機が来なくつちや話さないんだから」

私は下宿へ帰ってから一種の圧迫を感じた。

三十二

私の論文は自分が評価していたほどに、教授の眼にはよく見えなかったらしい。それでも私は予定通り及第した。卒業式の日、私は黴臭かびくさくなつた古い冬服を行李こうりの中から出して着た。式場にならぶと、どれもこれもみな暑そうな顔ばかりであつた。私は風の通らない厚羅紗あつらしゃの下に密封された自分の身体からだを持て余した。しばらく立っているうちに手に持ったハンケチがぐ

しよぐしよになった。

私は式が済むとすぐ帰って裸体はだかになった。下宿の二階の窓をあけて、遠眼鏡とおめがねのようにぐるぐる巻いた卒業証書の穴から、見えるだけの世の中を見渡した。それからその卒業証書を机の上に放り出した。そうして大の字なりになって、室へやの真中に寝そべった。私は寝ながら自分の過去を顧みた。また自分の未来を想像した。するとその間に立って一区切りを付けているこの卒業証書なるものが、意味のあるような、また意味のないような変な紙に思われた。

私はその晩先生の家へ御馳走ごちそうに招かれて行つた。これはもし卒業したらその日の晩餐ばんさんはよそで喰くわずに、先生の食卓で済ますという前からの約束であつた。

食卓は約束通り座敷の縁えん近くに据たえられてあつた。模様の織り出された厚い糊のりの硬こわい卓布テーブルクロスが美しくかつ清らかに電燈の光を射返いかえしていた。先生のうちで飯めしを食うと、きつとこの西洋料理店に見るような白いリンネルの上に、箸はしや茶碗ちやわんが置かれた。そうしてそれが必ず洗濯したての真白まっしろなものに限られていた。

「カラやカフスと同じ事さ。汚れたのを着きるくらい

なら、一層始めから色の着いたものを使うが好い。白ければ純白でなくつちや」

こういわれてみると、なるほど先生は潔癖であつた。書斎なども実に整然と片付いていた。無頓着な私には、先生のそういう特色が折々著しく眼に留まつた。

「先生は癩性かんしょうですね」とかつて奥さんに告げた時、奥さ

んは「でも着物などは、それほど気にしないようです

よ」と答えた事があつた。それを傍そばに聞いていた先生

は、「本当をいうと、私は精神的に癩性なんです。それで始終苦しいんです。考えると実に馬鹿馬鹿ばかばかしい性分しょうぶん

だ」といつて笑った。精神的に癩性という意味は、俗にいう神経質という意味か、または倫理的に潔癖だという意味か、私には解らなかつた。奥さんにも能く通じないらしかった。

その晩私は先生と向い合せに、例の白い卓布たくふの前に坐すわつた。奥さんは二人を左右に置いて、独り庭ひとの方を正面にして席を占めた。

「お目出とう」といつて、先生が私のために杯さかずきを上げてくれた。私はこの盃さかずきに対してそれほど嬉しいうれ気を起さなかつた。無論私自身の心がこの言葉に反響するよう

に、飛び立つ嬉しさをもっていなかったのが、一つの
原因げんいんであつた。けれども先生のいい方も決して私の嬉うれ
しさを唆そそる浮々うきうきした調子を帯びていなかった。先生は
笑つて杯さかずきを上げた。私はその笑いのうちに、些ちつとも意
地の悪いアイロニーを認めなかった。同時に目出たい
という真情も汲くみ取る事ができなかった。先生の笑い
は、「世間はこんな場合によくお目出とうといいたがる
ものですね」と私に物語っていた。

奥さんは私に「結構ね。さぞお父さんやお母さんかあは
お喜びでしょう」といつてくれた。私は突然病気の父

の事を考えた。早くあの卒業証書を持って行つて見せてやろうと思つた。

「先生の卒業証書はどうしました」と私が聞いた。

「どうしたかね。――まだどこかにしまつてあつたかね」と先生が奥さんに聞いた。

「ええ、たしかしまつてあるはずですが」

卒業証書の在処は二人ともよく知らなかつた。
ありどころ

三十三

飯めしになった時、奥さんは傍そばに坐すわっている下女げじょを次へ立たせて、自分で給仕きゆうじの役をつとめた。これが表立たない客に対する先生の家の仕来りしきたりしかつた。始めの一、二回は私も窮屈わたくしを感じたが、度数の重なるにつけ、茶碗ちやわんを奥さんの前へ出すのが、何でもなくなつた。

「お茶？ ご飯はん？ ずいぶんよく食べるのね」

奥さんの方でも思い切つて遠慮のない事をいうこと

があつた。しかしその日は、時候が時候なので、そんなに調戯からかわれるほど食欲が進まなかつた。

「もうおしまい。あなた近頃大変小食ちかごろ しょうしょくになつたのね」
「小食になつたんじやありません。暑いんで食われな
いんです」

奥さんは下女を呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイスクリームと水菓子みずがしを運ばせた。

「これは宅うちで拵こしらえたのよ」

用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に
振舞ふるまうだけの余裕があると見えた。私はそれを二杯更か

えてもらつた。

「君もいよいよ卒業したが、これから何をする気ですか」と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居際で背中を障子に靠しきいぎわたせていた。

私にはただ卒業したという自覚があるだけで、これから何をしようという目的あてもなかつた。返事にためらっている私を見た時、奥さんは「教師？」と聞いた。それにも答えずにいると、今度は、「じゃお役人やくにん？」とまた聞かれた。私も先生も笑い出した。

「本当いうと、まだ何をする考えもないんです。実は

職業というものについて、全く考えた事がないくらいなんですから。だいちどれが善^いいか、どれが悪^いいか、自分がやって見た上でないと解^{わか}らないんだから、選択に困る訳だと思ひます」

「それもそうね。けれどもあなたは必竟^{ひつぎよう}財産があるからそんな呑気^{のんき}な事をいつていられるのよ。これが困る人でご覧なさい。なかなかあなたのよう^{よう}に落ち付いちやいられないから」

私の友達には卒業しない前から、中学教師の口を探している人があつた。私は腹の中で奥さんのいう事実

を認めた。しかしこういつた。

「少し先生にかぶれたんでしよう」

「碌^{ろく}なかぶれ方をして下さらないのね」

先生は苦笑した。

「かぶれても構わないから、その代りこの間いつた通り、お父さんの生きてるうちに、相当の財産を分けてもらつてお置きなさい。それでないと決して油断はならない」

私は先生といつしよに、郊外の植木屋の広い庭の奥で話した、あの躑^{つづじ}躑の咲いている五月の初めを思い出

した。あの時帰り途に、先生が昂奮こうふんした語気で、私に物語った強い言葉を、再び耳の底で繰り返した。それは強いばかりでなく、むしろ凄すごい言葉であつた。けれども事実を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあつた。

「奥さん、お宅たくの財産はよッぽどあるんですか」

「何だつてそんな事をお聞きになるの」

「先生に聞いても教えて下さらないから」

奥さんは笑いながら先生の顔を見た。

「教えて上げるほどないからでしょう」

「でもどのくらいあつたら先生のようにしていただけるか、宅^{うち}へ帰って一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい」

先生は庭の方を向いて、澄まして烟草^{タバコ}を吹かしていた。相手は自然奥さんでなければならなかった。

「どのくらいってほどありませんわ。まあこうしてどうかこうか暮してゆかれるだけよ、あなた。——そりやどうでも宜^いいとして、あなたはこれから何か為^なさらくつちや本当にいけませんよ。先生のようにごろごろばかりしていちや……」

「ごろごろばかりしていやしないさ」

先生はちよつと顔だけ向け直して、奥さんの言葉を否定した。

三十四

わたくし

私はその夜十時過ぎに先生の家を辞した。二、三日うちに帰国するはずになっていたので、座を立つ前に私はちよつと暇乞いいとまごの言葉を述べた。

「また当分お目にかかれませんか」

「九月には出ていらつしやるんでしょね」

私はもう卒業したのだから、必ず九月に出て来る必要もなかった。しかし暑い盛りの八月を東京まで来て

送ろうとも考えていなかった。私には位置を求めるための貴重な時間というものがなかった。

「まあ九月頃ごろになるでしょう」

「じゃずいぶんきげんご機嫌よう。私たちもこの夏はことによるところかへ行くかも知れないのよ。ずいぶん暑そうだから。行ったらまた絵端書えはがきでも送って上げましょう」

「どちらの見当です。もしいらつしやるとすれば」

先生はこの問答をにやにや笑って聞いていた。

「何まだ行くとも行かないとも極きめていやしないんで

す」

席を立とうとした時、先生は急に私をつらまえて、「時にお父さんの病気はどうなんです」と聞いた。私は父の健康についてほとんど知るところがなかった。何ともいつて来ない以上、悪くはないのだろうくらいに考えていた。

「そんなに容易く考えられる病気じゃありませんよ。
たやす
にようどくしょう尿毒症が出ると、もう駄目なんだから」

尿毒症という言葉も意味も私には解らなかつた。この前の冬休みに国で医者と会見した時に、私はそんな

術語をまるで聞かなかった。

「本当に大事にしてお上げなさいよ」と奥さんもいった。「毒が脳へ廻まわるようになると、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」

無経験な私は気味を悪がりながらも、にやにやしていった。

「どうせ助からない病気だそうですから、いくら心配したって仕方ありません」

「そう思い切りよく考えれば、それまでですけれども」
奥さんは昔同じ病気で死んだという自分のお母さん

の事でも憶い出したのか、沈んだ調子でこういったなり下を向いた。私も父の運命が本当に気の毒になった。

すると先生が突然奥さんの方を向いた。

「静しず、お前はおれより先へ死ぬだろうかね」

「なぜ」

「なぜでもない、ただ聞いてみるのさ。それとも己おれの方がお前より前に片付くかな。大抵世間じや旦那だんなが先で、細君さいくんが後へ残るのが当り前のようになってるね」

「そう極きまった訳でもないわ。けれども男の方ほうはどうし

ても、そら年が上でしよう」

「だから先へ死ぬという理屈なのかね。すると己もお前より先にあの世へ行かなくっちゃならない事になるね」

「あなたは特別よ」

「そうかね」

「だって丈夫なんですもの。ほとんど煩^{わづら}った例^{ためし}がないじゃありませんか。そりやどうしたって私の方が先だわ」

「先かな」

「え、きつと先よ」

先生は私の顔を見た。私は笑った。

「しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする」

「どうするって……」

奥さんはそこで口籠くちごもった。先生の死に対する想像的な悲哀が、ちよつと奥さんの胸を襲襲ったらしかった。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更かえていた。

「どうするって、仕方がないわ、ねえあなた。」

ろうしょうふじょう

老少不定 っていうくらいだから」

奥さんはことさらに私の方を見て笑談^{じょうだん}らしくこう
いった。

三十五

わたくし

私は立て掛けた腰をまたおろして、話の区切りの付くまで二人の相手になっていた。

「君はどう思います」と先生が聞いた。

先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、もと固より私に判断のつくべき問題ではなかった。私はただ笑っていた。

「寿命は分りませんね。私にも」

「こればかりは本当に寿命ですからね。生れた時にちゃんと極きまった年数をもらって来るんだから仕方がないわ。先生のお父とうさんやお母さんなんか、ほとんど同おんなじよ、あなた、亡くなつたのが」

「亡くなられた日ですか」

「まさか日まで同じじゃないけれども。でもまあ同じよ。だつて続いて亡くなつちまつたんですもの」

この知識は私にとって新しいものであつた。私は不思議に思つた。

「どうしてそう一度に死なれたんですか」

奥さんは私の問いに答えようとした。先生はそれを

遮さへぎった。

「そんな話はお止よしよ。つまらないから」

先生は手に持った団扇うちわをわざとばたばたいわせた。

そうしてまた奥さんを顧みた。

「静しず、おれが死んだらこの家うちをお前にやろう」

奥さんは笑い出した。

「ついでに地面も下さいよ」

「地面ひとは他のものだから仕方がない。その代りおれの持ってるものは皆みんななお前にやるよ」

「どうも有難う。けれども横文字の本なんか貰^{もら}つても仕様がないわね」

「古本屋に売るさ」

「売ればいくらぐらいになつて」

先生はいくらともいわなかった。けれども先生の話は、容易に自分の死という遠い問題を離れなかった。そうしてその死は必ず奥さんの前に起るものと仮定されていった。奥さんも最初のうちは、わざとたわいのない受け答えをしているらしく見えた。それがいつの間にか、感傷的な女の心を重苦しくした。

「おれが死んだら、おれが死んだらつて、まあ何遍なんべんおつしやるの。後生ごしようだからもう好いい加減にして、おれが死んだらは止よして頂戴ちやうだい。縁喜えんぎでもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思い通りにして上げるから、それで好いいじゃありませんか」

先生は庭の方を向いて笑った。しかしそれぎり奥さんの厭いやがる事をいわなくなつた。私もあまり長くなるので、すぐ席を立つた。先生と奥さんは玄関まで送つて出た。

「ご病人をお大事だいじに」と奥さんがいった。

「また九月に」と先生がいった。

私は挨拶あいさつをして格子こうしの外へ足を踏み出した。玄関と

門の間にあるこんもりした木犀もくせいの一株ひとかぶが、私の行手ゆくてを

塞ふさぐように、夜陰やいんのうちに枝を張っていた。私は二、

三步動き出しながら、黒ずんだ葉に被おおわれているその

梢こずえを見て、来たるべき秋の花と香を想おもい浮べた。私は

先生の宅うちとこの木犀とを、以前から心のうちで、離す

事のできないもののよう、いつしよに記憶してい

た。私が偶然その樹きの前に立って、再びこの宅の玄関

を跨またぐべき次の秋に思いを馳はせた時、今まで格子の間

から射^さしていた玄関の電燈がふつと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へはいったらしかった。私は一人暗い表へ出た。

私はすぐ下宿へは戻らなかつた。国へ帰る前に調^{ととの}える買物もあつたし、ご馳走^{ちそう}を詰めた胃袋にくつろぎを与える必要もあつたので、ただ賑^{にぎ}やかな町の方へ歩いて行つた。町はまだ宵の口であつた。用事もなさそうな男女^{なんによ}がぞろぞろ動く中に、私は今日私といつしよに卒業したなにがしに会つた。彼は私を無理やりにある酒場^{バー}へ連れ込んだ。私はそこで麦酒^{ビール}の泡のような彼の

気^き怠^{えん}を聞かされた。私の下宿へ帰ったのは十二時過ぎであつた。

三十六

私はその翌日わたくしも暑さよくじつを冒おかして、頼まれものを買集めて歩いた。手紙で注文を受けた時は何でもないように考えていたのが、いざとなると大變臆おつくう劫おつに感ぜられた。私は電車の中で汗を拭ふきながら、他の時間ひとと手数料に気の毒という観念をまるでもっていない田舎者いなかものを憎らしく思つた。

私はこの一夏ひとなつを無為に過ごす気はなかつた。国へ

帰つてからの日程というようなものをあらかじめ作つておいたので、それを履行するに必要りこうな書物も手に入れなければならなかつた。私は半日を丸善まるぜんの二階で潰す覚悟でいた。私は自分に関係の深い部門の書籍棚の前に立つて、隅から隅まで一冊ずつ点検して行つた。

買物のうちで一番私を困らせたのは女の半襟はんえりであつた。小僧にいうと、いくらでも出してはくれるが、さてどれを選んでいいのか、買う段になつては、ただ迷うだけであつた。その上あたひ価きわが極めて不定であつた。安かろうと思つて聞くと、非常に高かつたり、高かろ

うと考えて、聞かずにいると、かえつて大変安かったりした。あるいはいくら比べて見ても、どこから価格の差違が出るのか見当の付かないのもあつた。私は全く弱らせられた。そうして心のうちで、なぜ先生の奥さんを煩わさなかつたかを悔いた。

私は鞆かばんを買つた。無論和製の下等な品に過ぎなかつ

たが、それでも金具やなどがぴかぴかしているのので、田舎ものを威嚇おどかすには充分であつた。この鞆を買うという事は、私の母の注文であつた。卒業したら新しい鞆を買つて、そのなかに一切いっさいの土産みやげものを入れて帰

るようと、わざわざ手紙の中に書いてあった。私はその文句を読んだ時に笑い出した。私には母の料簡りょうけんが解わからないというよりも、その言葉が一種の滑稽こっけいとして訴えたのである。

私は暇乞いとまごいをする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立つて国へ帰った。この冬以来父の病気について先生から色々の注意を受けた私は、一番心配しなければならぬ地位にありながら、どういふものか、それが大して苦にならなかった。私はむしろ父がいなくなつたあとの母を想像して気の毒

に思つた。そのくらいだから私は心のどこかで、父はすでに亡くなるべきものと覚悟していたに違ひなかつた。九州にいる兄へやつた手紙のなかにも、私は父の到底故とてももとのような健康体になる見込みのない事を述べた。一度などは職務の都合もあろうが、できるなら繰り合せてこの夏ぐらい一度顔だけでも見に帰つたらどうだとまで書いた。その上年寄が二人ぎりさだで田舎にいるのは定めて心細いだろう、我々も子として遺憾いかんの至いたりであるというような感傷的な文句さえ使つた。私は實際心に浮ぶままを書いた。けれども書いたあとの気

分は書いた時とは違っていた。

私はそうした矛盾を汽車の中で考えた。考えているうちに自分が自分に気の変りやすい軽薄もののように思われて来た。私は不愉快になった。私はまた先生夫婦の事を想い^{おも}浮べた。ことに二、三日^{ばんめし}前晩食に呼ばれた時の会話を憶い出した。

「どつちが先へ死ぬだろう」

私はその晩先生と奥さんの間に起った疑問をひとり口の内で繰り返してみた。そうしてこの疑問には誰も自信をもって答える事ができないのだと思った。しか

しどつちが先へ死ぬと判然分つていたならば、先生はどうするだろう。奥さんはどうするだろう。先生も奥さんも、今のような態度でいるより外に仕方がないだろうと思つた。（死に近づきつつある父を国元に控えながら、この私がどうする事もできないように）。私は人間を果敢ないものに観じた。人間のどうする事もできない持つて生れた軽薄を、果敢ないものに観じた。



こころ 上 -先生と私-
夏目漱石 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「こころ」集英社文庫、集英社

1991（平成3）年2月25日第1刷

1995（平成7）年6月14日第10刷

初出：「朝日新聞」

1914（大正3）年4月20日～8月11日

※ 誤植の修正は「漱石全集」岩波書店を参照しました。

※ 底本は、物を置える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-886）を、大振りにつけています。

入力：j.utiyama

校正：伊藤時也

1999年7月31日公開

2004年2月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ